なくそう貧困。命の水を！

アジアネット

JAFS NEWS & REPORTS 2019年秋 139

特集 JAFS 創立40周年を迎えて

巻頭言

日本のアジア平和希求への証

萩尾 千里
アジア協会アジア友の会
会長

「誰もが生まれてきて良かったと思えるような社会」を目指し、国際ボランティアグループ「エポス（注1）」（代表 村上公彦氏）を設立し、「インドに井戸を贈る運動」を始めたのが1972年。その後、「アジア協会アジア友の会」を設立。事務局の拠点を大阪に置き、そこからアジア諸国へのネットワークを18カ国、69カ所に拡大して今年で40周年を迎えます。

設立から実現に到るまで、理念、先見性、構想力、実行力、そのどれをとっても村上公彦現専務理事の存在無くしては考えられません。同時に、その支えとなった会員の皆様の協力なくしては、今日の輝かしい活動実績はあり得ません。深い感謝の念を禁じ得ません。

敗戦によって廃墟と化した日本が奇跡の復興を遂げ、世界を驚かせましたが、それでも当時の国民の生活は貧しく、極貧のアジアに手を差し伸べるほどのゆとりは決してありませんでした。そうした状態にありながら、アジアの生活環境の改善に立ち上がった「志」こそは誇るべきものでもあります。

以来、40年の歳月を経てアジア諸国も経済成長を遂げ、極貧状態こそ脱したとはいえ、まだ貧困、無教育がもたらす病気や差別といった不幸が解消されていないのが現状です。

国民福祉向上は基本的にはそれぞれの国の責任とはいえ、それを自力で達成できない国がアジアには多々あります。幸い我が国は、先人の英知と努力によって、アジアはもちろん世界的にも格差が少なく安定した社会を構築することができました。

しかし我が国を取り巻く周辺国の国状を俯瞰（ふかん）すると、この地域が今後とも決して安定した地域になるという保証はありません。ましてや我が国は、日中戦争から太平洋戦争に至る70数年を経た今日でも、いぜん古傷が癒えたとはいえません。日本がこの先、世界の先頭に立って、平和希求への「証」としても、現在のJAFSの活動を継続、強化して行くことが必要ではないかと考えます。

具体的にはアジア協会アジア友の会の役割は、交流を通じて相互理解をはかることだろうと思います。と言いますのはここ数百年の間、世界は西洋文明が支配してきました。しかし、その西洋文明も価値観の大きな変化に揺らぎ始めています。

その原因はグローバル化による文化の多様化です。文明と言ってもその根底には文化があります。文化とは人間が異なる環境下で生きて行くための生き様であり、それ故に個性でもあります。一方、文明は普遍性です。とは言っても文化が根底にある以上、絶対普遍ではありません。それが急速に進むグローバル化によって文化の摩擦が起こります。それを対立にしないのは交流による相互理解です。この役割こそアジア協会アジア友の会に与えられたミッションだと考えます。そのためにも、会員の皆様のこれまで以上の御協力、御支援をお願いいたします。

（注1）エポス：ギリシャ語の「エイレネポイオス」（平和を作り出す人）から3文字をとった。

●プロフィール●

はぎお・せんり
1960年関西大学商学部卒。
朝日新聞編集委員、関西経済同友会常任幹事・事務局長、大阪国際会議場社長を経て、大阪国際フォーラム会長。2010年よりアジア協会アジア友の会会長。

JAFS会員綱領

私たちは、世界の平和と人間の基本的人権を守るために人々との「友情と信頼」に基づく「理解と協力と連帯」の輪をアジアと世界に広げます。

かかる目的をもって私たちJAFS会員は以下のことに努めます。

一、より人間らしい地球社会の創造をめざします。

一、アジアと世界の人々の幸せに奉仕します。

一、地球の自然環境を大切に守ります。

一、生活の無駄を省き、地球資源を大切にします。

一、これらの奉仕活動を通して、自分と他人の生命（いのち）の価値を高めます。

以上

アジアネット

JAFS NEWS & REPORTS 139
2019年秋

JAFS
since 1979
公益社団法人アジア協会アジア友の会
Japan Asian Association & Asian Friendship Society

●主な目次●

「巻頭言」 日本のアジア平和希求への証　02
特集＝JAFS 創立40周年を迎えて
村上公彦事務局長に聞く　04〜07
アジアとともに――あゆみ年表　08・09
海外提携団体からの寄稿　10〜13
JAFS40周年を前に④　貧困対策　14・15
われら JAFS の仲間たち①　16〜19
フィリピン映画祭で「セカミズ」上映　19
第６回アジア･ユースサミット　20・21
井戸寄贈報告　22・23
ネパールのプロジェクト地報告　24
36回目数えた土と水と緑の学校　25
「JAFSプラザ」＝国内の活動　26・27
汗と笑顔の野菜づくりで次世代を育てる／ＢＢＱパーティーで国際交流／大人の「土水」､熊野の文化資源を学ぶ／モーセの兄の子孫･コーヘンさん講演
新入会員紹介・領収報告　28・29
「里子の笑顔」「アジアの友から」　30
「環境コラム」　31

アジア協会アジア友の会とは

アジア18カ国に井戸を贈る国際協力団体（NGO）です。1979年に大阪で設立。誰もが生まれてきて良かったと思える社会を目指し、2019年3月現在、井戸建設（累計2033基）や植林（累計255万本)、子ども教育支援を中心に活動しています。全国都道府県認可の社団法人取得第１号団体です。2012 年４月１日からは、内閣総理大臣の認定を受け、公益社団法人になりました。

海外との交流・協力活動は、インド、インドネシア、バングラデシュ、タイ、マレーシア、フィリピン、スリランカ、ネパール、韓国、カンボジア、シンガポール、ミャンマー、ラオス、中国、ベトナム、モンゴル、パキスタン、アフガニスタン、さらに西アフリカのブルキナファソにも広がり、友情のネットワークが形成されています。

日本国内でも、各地でチャリティープログラム、自然環境プログラムなどを行っています。

※ホームページ　https://jafs.or.jp

本会へのご寄付は、寄付金控除の対象です

ＪＡＦＳは内閣府より公益社団法人としての認定を受けています。ＪＡＦＳへの寄付金や会費（社員会費は除く）は、申告によって、所得税、法人税、相続税について税制上の優遇措置（寄付金控除）を受けることができます。

確定申告の際、税額控除、所得控除のいずれか有利な方を選択できます。本会発行の領収書を添付して申告してください。法人税は損金の額に算入することができます。相続税は最寄りの税務署などにお問い合わせください。

JAFS 創立40周年　村上公彦事務局長に聞く

人の交流こそが支援の基盤

現地主義を徹底して貫け

【プロフィール】むらかみ・きみひこ：1941年大阪府生まれ。65年同志社大学大学院修士課程修了。68年、牧師に。2009年タイ国立ランパーン・ラジャパット大学より名誉博士号授与。日本基督教団寝屋川教会牧師

アジア協会アジア友の会（JAFS）は10月に創立40周年を迎えます。井戸を贈る運動から始まり、トイレ建設や教育支援、緑化、災害緊急援助などへと、アジアの人たちの自立を支援する活動の分野は大きく広がりました。この節目を機に、JAFSの創設者である村上公彦事務局長（専務理事）に、これまでの歩みを振り返ってもらいました。

（聞き手＝松本督（すすむ）・「アジアネット」編集アドバイザー）

「水」がアジアの共通項だ

――40周年へのご感想を

もう40年たつのかという感じ。いろいろあったけれど、まだ10年しかたっていないような感覚です。

――アジアに関心を持ったいきさつは？

大学4年の1962年夏、米国学生協会が主催して東アジア各地で開かれたセミナーに参加したことが、アジアに目を向けるきっかけになりました。当時の私は、欧米には関心があったけど、アジアへの関心は余りありませんでした。参加してみると、欧米の学生はアジアの実情をよく知っており、日本はもっとアジアに目を向けるべきだと痛感しました。

帰国後、セミナーに参加した日本の学生らと研究会を設立し、代表も務めました。その縁で、65年から2年間、インドに留学しました。前年の東京五輪で海外旅行が自由化された直後です。インドではアラブや東南アジアなどから来た印僑（他国に移住したインド人）の子弟らと交流し、伝統文化の多様性と貧困とが共存している姿を知りました。

70年にスイスの研究所に留学しました。東西冷戦の中で、私の研究テーマは開発問題。研究所では米英など西側諸国の学生とソ連はじめ東欧圏からの学生が好きなテーマで研究に励んでいました。東独と西独の学生が宿舎の同じ部屋に住んでおり、「政治的対立の問題はないの」と尋ねると、2人の答えは「政治と人間は違う。我々は人間としてここに来ている」。人間同士の友情を紡ぎ出せるこうしたネットワークづくりをアジアでも始めたいと感じ、インド留学などの際、知り合ったアジアの若者たちと78年夏、香港でネットワークづくりを協議しました。これが現在、毎年開催しているアジア国際ネットワークセミナー（AINS）につながっていきます。

一方、途上国に医師、看護師ら医療従事者を送り出す運動にもかかわる中で、ネパールに結核撲滅の予防ワクチンを送るための使用済み切手運動に取り組むボランティアを中心に、国際ボランティアグループ「エポス」（平和を作り出す人の略号）を72年に結成し、アジア各地に毎年1人を送って現地に住み込む体験を始めました。このエポスがJAFSの前身です。

――1979年のJAFS発足は「インドに井戸を贈る運動」としてメディアに紹介されました。なぜ井戸から始めたのですか？

香港でのネットワークづくりの協議では、アジアの多くの貧困地域では飲料水に事欠く状況が指摘されました。実は私もインド留学中、農家で出された水が原因で、腸チフスにかかり、入院しています。その体験からも「アジアの共通項は水だ」と思いました。ほかにも事業を考えたんやけど、「井戸を贈る運動が一番インパクトがある」とのアドバイスもあり、その線に沿って記者発表しました。翌80年の国連総会が「国際飲料水及び衛生の10年」の決議を採択したことも追い風になり、井戸を贈る運動は広がったと思います。

――井戸・飲料水支援はその後、フィリピンやネパール、カンボジア、ネパールなどアジア12カ国、約2000基まで広がりました。現地との提携関係はどのように築きましたか？

どの地域に井戸を贈るかはJAFSが選ぶのではなく、現地の受け入れ団体が決めます。幸いインド留学の際、知り合った仲間を通じて、「受け入れ

第1号井戸の「井戸掘り調査団」。前列右が村上事務局長＝1980年

当時は荒れ地だったこの地には今、植林された豊かな緑が生い茂っている＝いずれもインド、マハラシュトラ州ナグプール

団体がしっかりしている」「誰が責任者かはっきりしている」所から提携を始めました。現地との具体的な人間関係がなければ、欧米型の国際援助機関と同じ。ましてやその国の政府が地域選定に絡むと、現地に届く費用は援助費用の15％程度に減ってしまう「15％援助」になりかねません。

対象地域との交流は欠かせません。ある途上国での経験ですが、現地ボランティアを交えたミーティングは夜だけ。調べてみると、現地ボランティアは昼間、他の国際NGOの仕事で生活費を稼いでいました。このような欧米型援助では、「自分たちの事業だ」という自立への意欲も責任感も生まれません。当事者意識が育つよう、当方の進め方を話し合いました。

A村の井戸が完成したら、A村のリーダーは責任を持って隣のB村に声を掛ける、B村はさらに隣のC村に声掛けするなど、地域の広がりを築いていくのが大切です。現地との付き合いはなかなか大変ですが。

パンダン水道パイプラインの建設工事。日本からのボランティアと現地の人々が一体となって力を合わせ、パイプを次々につないで地中に埋め込んだ＝1995年

国際協力の熱気が後押し

――井戸・飲料水支援ではフィリピン・パナイ島のパンダン・プロジェクト〈注1〉が成功のモデルケースとして本や新聞などで紹介されました。

1990年夏、事務所に掛かってきた1本の電話が始まりでした。たどたどしい日本語で「フィリピンのアマンテです。慶応大学で研究しています。故郷のパンダンに井戸を掘ってもらえませんか」。要領を得ないのでアマンテさんにJAFS理事会で説明してもらい、パンダンは海辺にあるため井戸水に海水の塩分や汚水が混じり、高血圧などの病気が多発している実情がわかりました。アマンテさんは国際協力事業団（JICA）にも打診したのですが、JICAは現地政府の要請がないと援助できない。それでJAFSに頼んで来たわけです。

翌夏、アマンテさんと現地を初めて訪れました。空港に着くと大勢の人が待ち受け、街中にもついてきて「戦争中に日本軍はああした、こうした」など言い立てる。私が日本人と知った老婦人からは「あんたらが息子を殺した」と詰め寄られました。アマンテさんに「あなたは戦後初めてパンダンを訪れた日本人です」と説明され「えらいところに来た」と正直感じました。

「命の水を何とか確保したい」と思いながら帰国しましたが、幸い、JAFS会員に井戸掘り会社の経営者がおり、その縁で水道事業の専門家も紹介されました。彼らが現地調査を重ねた結果、約10キロ離れた川の湧水をパイプラインで引く計画が固まりました。

学生や労組員ら日本のボランティアがワークキャンプで次々現地を訪れ、パイプライン埋設作業に従事しましたが、現地住民は最初の1年間、工事を眺めているだけ。ボランティアの意味が理解されず、逆に「この仕事でいくら儲かるのか」と質問されるほど。そこで町長の妻に日本に来てもらい、募金活動を見てもらうと、「こんなの初めて。帰って住民に伝える」と協力を約束。そこから現地住民が工事に参加してくれるようになり、「日本人は優しい」との理解も広がり、住民とボランティアが夜、ダンスを楽しむなど交流が深まりました。

いま振り返ると、国際協力に日本全体が勢いづいていた時代背景にマッチしたことが成功の大きな背景になったと思います。加えて、募金やワークキャンプを支えた人の輪、水道事業に関する高い技術力など、ラッキーな要素が重なったと感じます。

――支援事業は井戸・飲料水から子ども支援、貧困対策、環境対策などへと、幅を広げてきました。日印友好コスモニケタン学園〈注2〉のように学校を建設し、運営も支援するといった展開もあります。当然、費用は掛かりますが、支援の「原則」について、どう考えますか？

井戸が出来るまで、水くみは女性や子どもにとって1日がかりの重労働でした。井戸が完成し、重労働から解放された女性は「内職をやりたい」と考えます。子どもは学校に行く時間ができ、学校がない地域では「寺子屋で」との願いも生まれます。そうした願いを無視する訳にいきません。学校を建設すると、今度は先生を呼んでこようとなります。掘った井戸の数だけ現地の人々との繋がりがあるわけで、現地の要望に応える援助をわずかでも続けながら、自立を促していく姿勢が大事だと思うのです。

西欧流の支援の原則は、「魚を与えるよりは魚を獲る道具を与えよ」。さらに一歩進めて「魚を獲る道具の作り方を教えよ」となります。日本の私たちは猿蟹合戦になぞらえて「握り飯より柿の種」としました。要は現地の方々が「俺たちがやったんや」と自信を持って言えるようになることです。

――各種の支援事業で、困ったことやうまくいかなかったことは？

失敗はいっぱいあります。人間関係が主な原因ですが、当方の趣旨が相手側にうまく伝わっておらず、相手側の動きが腑に落ちないとか、資金投入しても計画が進まず、言い訳ばかりが返ってくるようなケースは赤信号です。植林事業で現地の受け入れ団体と政府の方針が食い違った結果、ワークキャンプだけに縮小したような例もあります。要は「あかん」と思ったら、過去の経緯に固執しないで、さっさと見切りをつけることです。

――アジアの政情は、宗教問題や民族問題などが絡んで不安定な面が目立ちます。活動を展開するうえで、注意している点は何でしょうか？

JAFSの交流相手は地域に根付いた提携団体です。それほど活動に影響は受けていません。宗教問題にしろ、民族問題にしろ、民衆レベルでは問題になっていないのに、利権を持つリーダーが自らの支配力を維持するため対立をあおり、民衆が迷惑するという構造があるのではないでしょうか。

自信を持って社会貢献を

――この40年で日本社会のアジアに対する視線は変わったと感じますか。若者たちの関心度はどうでしょう？

最近、若い人に深くは接していないので、断言はできませんが、20年ほど前は「世界のため何か取り組まないといかん」という雰囲気はありました。この10年ほどは「まず自分のことを大事にしたい。余裕が出来れば次の段階でやりましょう」という傾向かなと感じます。若者の心優しさとJAFSのようなNGO活動との接点をどう見つけるかが課題ですね。

――『アジアネット』132号の巻頭言で「私民から市民へ」と訴えられました。

個人主義ではなく、自分が何か社会の役に立てるのではと掘り下げてほしい。どの仕事も社会貢献になっており、もっと自信を持てばいい。ボランティア活動を体験すると、何が大切かを考え、「お互いの命が大事」となります。

――これからのJAFSの目指すべき目標を3点に絞って

その辺はこれからの時代を担う人たちに考えていただきたい。ただ原則としては（1）交流、国際ネットワークを続ける（2）現地主義に徹底していく（3）地域市民の運動体を国内外の各地に作っていく、です。

――個人的な点ですが、JAFS事務局長と教会牧師との両立で大変お忙しいのでは？

小学校2年の時、キリスト教会の日曜学校に通い始め、先生の話が面白かったので、教会通いを続けたのが、牧師を志すきっかけです。宗教の基本は「命を大切にし、どう全うするか」、牧師の仕事は「一人一人に生きる勇気を与える」。だからボランティア活動は牧師の仕事そのものです。海外出張などで日曜礼拝を欠席する場合、以前は信者の方が代わりに講話してくれました。今は牧師になった息子が務めてくれるので、支障ありません。

〈注1〉**パンダン・プロジェクト**　フィリピンのパナイ島は首都マニラから約300キロ南、パンダン町は島の北西部に位置する。JAFSは町中心部から約10キロ離れた川の上流マロンパティの湧水を途中の丘にポンプアップし、パイプラインで町中に送る計画を立案。1994年4月に起工し、日本からのボランティアと現地住民延べ約2万人がパイプライン埋設工事に従事して99年3月に完成した。総工費約8千万円。ロータリークラブや労組などが多額の寄付を寄せた。第2次大戦中に日本軍が島を占領し、抗日ゲリラ鎮圧などの際、住民らに被害が出たことから、反日感情が強かったが、ボランティアらの献身ぶりに心を打たれた元ゲリラ兵士らの提案で「元日本人無名戦士之墓」が建立されるという「副産物」も生まれた。ルポルタージュ『マロンパティの精水』（小嶋忠良著、PHP研究所）がプロジェクトの全貌を伝える。この本を元に映画化され、今秋、上映公開開始。

〈注2〉**日印友好コスモニケタン学園**　インドの貧しい農村の子どもたちが学校で学べるように、1996年、JAFSと現地提携団体BSVIA（Bharateeya Small and Village Industries Association＝バルティーヤ小規模村工業協会）が協力し、インド南部のカルナータカ州ビジャプールにつくった学校。それまでに村には、JAFSを通じた日本からの支援で井戸が作られ、子どもたちが学校に通える時間ができていた。当初の高校開設後、小学校、農業訓練センター、寮、職業訓練校などが増設され、より多くの子どもが多様な教育を受けられるようになっている。

アジアとともに　JAFS 40年のあゆみ年表

1972年　　アジアの大地と自然、人々を愛し、ボランティア活動に関心のある仲間が集まって国際ボランティアグループ「エポス」を結成
1978年　　西ベンガル大洪水視察。佐藤繁範氏を派遣
1979年10月　「エポス」を解消。インドに井戸を贈る運動として、アジア協会アジア友の会を発足（代表・村上公彦、事務所・浪花教会）
12月　機関紙『アジアの祈り』第１号発行❶
1980年２月　インドで活動開始　ナグプール市に第１号提携団体EDCI と農村開発センター（プラガティセンター）設立
1980年５月　ナグプールのググリー村に第１号の井戸完成
1981年４月　インドネシアとの活動開始❷。第１号提携団体結成
８月　インド第１回ワークキャンプ❸。以後各国で毎年実施
1982年４月　事務所を浪花教会から北新地・聖書館ビルへ移転
５月　マレーシアで活動開始。提携団体 AFS-Malaysia 結成
７月　『JAFS NEWSLETTER　Vol.1』No.1 発行
８月　バングラデシュでの活動を始め、提携団体 AFS-Bangladesh 結成
1984年４月　タイとの交流活動開始
８月　第１回土と水と緑の学校（自然体験キャンプ）開催
1985年７月　ネパールで活動を始め、第１回ワークキャンプ実施
1986年５月　地球環境保全のための「国際グリーンスカウト運動」を村上事務局長の発案により提唱
10月　国際交流基金「地域交流振興賞」受賞
第１回ぞうすいの会
韓国との活動開始。忠清南道禮山農科大学との協力関係できる
1987年６月　台湾とのネットワーク開始。台湾アジア友の会設立
1988年４月　社団法人アジア協会アジア友の会認可（都道府県知事認可第1号）、初代会長に柴谷貞雄氏（元阪急電鉄社長）就任
スリランカの活動開始、自転車再生プロジェクト実施
1988年５月　大阪府知事表彰受賞
７月　外務大臣賞（表彰）受賞
1989年６月　事務局を肥後橋・平和相互ビルへ移転
８月　第１回アジア国際森林研修を和歌山県新宮市で実施
1989年12月　第１回毎日国際交流賞受賞
1990年５月　第２代会長に横井克己氏（元松下冷機社長）が就任
９月　香港とのネットワーク開始。AFS 香港発足
10月　第１回アジア国際ネットワークセミナーをタイ、チェンマイで開催＝❹はその準備会議
1992年４月　国内での地域活動を開始。推進のため地区世話人オリエンテーション開催
1993年４月　「アジア里親の会」開始
1994年４月　フィリピン、パンダン町で全長10kmの飲料水パイプラインと簡易水道建設に着工
６月　カンボジアに KAFS が設立され、提携関係を結ぶ
1994年10月　大阪市民表彰受賞
1995年１月　阪神・淡路大震災救援･支援活動開始❺（～1999年）
２月　事務所を大一ビル（現・山下ビル）へ移転
1996年６月　第14回朝日森林文化賞受賞
熊野森林文化国際交流会（アジア協会アジア友の会熊野地方部会）
11月　日印友好学園コスモニケタンのハイスクール落成❻
1999年４月　フィリピン、パンダンの飲料水パイプラインと簡易水道全区間が完成❼
JAFS 創立20周年を機に「地球の水と緑を大切にしよう！全国縦断ウォーカソン（チャリティウォーク）」実施❽。以後、毎年各地域で実施
1999年６月　第１回国際グリーンスカウト大会開催
2000年５月　第３代会長に柴田俊治氏（元朝日放送会長）就任
2002年７月　第１回日韓文化交流セミナー開催（～2007年）
2004年10月　JAFS 創立25周年記念式典開催
2005年５月　大阪府知事より団体功労賞受賞
2007年８月　日印友好ユースサミット開催（その後アジアユースサミットへ発展し、19年現在６回開催）
2010年５月　第４代会長に萩尾千里（当時・大阪国際会議場社長）就任
2011年３月　東日本大震災緊急支援事業を開始
11月　事務所を官報ビルへ移転
2012年４月　公益社団法人アジア協会アジア友の会設立（公益社団法人として認定を受ける）
６月　公益社団法人第１回社員総会を開催
2013年11月　フィリピン台風ハイエン緊急支援事業を開始
2015年４月　ネパール中部地震緊急支援事業開始
2016年４月　熊本地震緊急支援事業開始
2016年12月　第１回アジアン・チャリティ・フェスティバル開催
2017年11月　JAFS ネパール事務所開所

40年間の支援実績

（2019年３月末現在）

井戸・パイプライン建設：2,033基
学校・コミュニティセンター建設：134棟
教育里子：1,174名
トイレ建設：2,478基
植林：2,550,094本
バイオガスプラント設置：1,144基
自転車寄贈：31,430台

貧困を乗り越え成長するカンボジア

「40周年」に寄せて ①

KAFS事務局長
ロン・チョーン（カンボジア）、カンボジア国家警察参事官

JAFSや村上事務局長と関わる私の人生と活動のあゆみ

1975年から79年にかけて、ポルポト政権の貧困と困難から誰も逃れることはできませんでした。政権はカンボジアをゼロまで破壊し、100％の人々が貧困者でした。

79年にポルポト政権が終わり、90年代に大学生になってから私は社会事業に携わり、カンボジアの改善と発展に関する多くの活動に参加しました。私はクメール学生と知的協会（KSIA）のメンバーであり大統領の助手でした。93年の国連主催の総選挙中やその後に次々とできたカンボジアの国際NGOや国内NGOによってソーシャルワーカーとしての訓練を受けました。KSIAでは、人権、エイズ、その他のボランティア活動に関する啓発キャンペーンに積極的に取り組み、KSIAの活動と社会に尽力しました。

93年に、私はかつて外務省の職員であった私の上司（ウン・シン氏の同僚）から、ノルウェーのサマーキャンプかインドのネットワークセミナーに参加するよう言われました。ウン・シン氏はアジア国際ネットワークセミナー（AINS）に参加する優秀で献身的な学生を求めていたのです。私は本当はヨーロッパに行きたかったのですが、社会や文化の点でヨーロッパはカンボジアと比べあまりにも違うと理解していたので、インドに行くことにしました。初めての海外旅行でとても興奮し、たくさん夢を持っていました。ルーテルワールドサービスのノバート・クライン氏とタイのコーソン・スリサン氏の助力を得てインドのナグプールに到着し、AFSの指導者たち、中でもJAFSの村上公彦事務局長に出会いました。私はJAFSの目的と業績、村上氏のビジョンと働きに非常に影響され、感銘を受けました。

AINSの間に、私はAFSのリーダー何人かに会い、彼らから多くを学びました。私は村上氏に近づき、過去20年間に多くの被害を受けたカンボジアの人々への支援を求めました。

前向きな反応をもらって、私はインドからの帰国後、ウン・シン氏の指導のもと、カンボジアでAFSを組織しました。村上氏と小原純子氏の2度の訪問の後、95年に最初の国際ワークキャンプを成功裏に実施しました。クメールアジア友の会（KAFS）を設立し、政府に登録しました。目標は以下の目的の追求によって農村地域の貧しい人々の生活を改善することです。

・村の開発を通じてカンボジアを再建
・アジア諸国と友情を深め、連帯強化
・アジア文化の理解を促進

以来KAFSは、農村の人々の貧困の軽減と生活の向上を支援することで、目覚しい成果を上げています。

①37の幼稚園と小学校、9つのトイレを建設　②マイクロクレジット：貸付残高は、設立当初の4万米ドルから利子の累積で約45万米ドルに増加し、現在55の村で活用　③浄水供給：井戸建設445基　④里子207人を支援　⑤国際親善キャンプ、サイクル・エイド、無料ヘアカット、基礎外国語の無料クラス、植林、緊急援助など

私の今後の活動計画

年間約7％の高い経済成長により、カンボジアは最貧国から脱出できました。経済成長基盤はさらに多様化しています。貧困率は10％以下に下がりました。そして人々の間の所得格差は減少しました。とはいえ、やるべきことはまだたくさんあります。今後の活動計画は以下の通りです。

①各国のAFS支部を強化する。AFS各支部はJAFSに対して経済的依存傾向があるにも関わらず、NGO担当者は事業ビジネス的な面を考えずに、支出志向のところがある。収入創出型の活動を生み出すことでより自立する方向に向かうべきだ。

②専門知識と財政的支援に関してより多くの専門家とビジネスマンを関与させることによって各国・各地域にネットワークを強化する。

③地域社会のプロジェクトやネットワーク活動を支援するために、AFS財団または共通基金が各支部の貢献で設立されるべきだ。

④さらなる人的資源開発をめざす。

（翻訳：編集スタッフ　大本 和子）

Rong Chhorng

President of KAFS, Cambodia

History of my life and activities in relation to JAFS and Mr. Murakami

No one could escape poverty and hardship of Khmer Rouge regime, 1975-1979. The regime had destroyed Cambodia to a zero, 100 per cent of people were poor.

I had been involved in social works and participated in a lot of activities in relations to the improvement and development of Cambodia after Khmer rouge regime, 1975-1979. I was member of Khmer Students and Intellectual Association (KSIA) and was assistant to the President. I was trained as social worker by international and national NGOs in Cambodia which was flourished during and after the general election sponsored by the United Nations in 1993. At KSIA, I was active in campaign awareness on human rights, AIDS, and other volunteer activities. I was active and committed to KSIA's activities and society.

In 1993, I was asked by my supervisor, who used to be the staff member of the Ministry of Foreign Affairs and colleague of Mr. Ung Sean, to join a summer camp in Norway or participate in the Network seminar in India. Mr Ung Sean had asked my supervisor for a good and committed student to join the AINS. I really wanted to go to Europe, but I decided to go to India instead with the understanding that Europe is too far different comparing to Cambodia in term of social and culture. It was my first trip abroad and I was so excited and had a lot of dreams. With the assistance of Mr. Nobert Klein, Lutheran World Service, and Dr. Koson Srisang, I finally arrived at Narpur, India, and met all AFS's leaders, especially Rev. Kimihiko Murakami of JAFS. I was very much influenced AND INSPIRED by the objectives and works of JAFS AND VISION OF Rev. Kimihiko Murakami.

During the AINS, I have met several leaders of AFS and have learned a lot from them. I approached Rev. Kimihiko Murakami and asked for support for Cambodian people who have suffered a lot for the last two decades.

With positive response, I organised the AFS in Cambodia upon my return from India with guidance of Mr. Ung Sean. After two visits of Rev. Kimihiko Murakami and Mrs. Ohara Junko, we successfully organized the first international workcamp in 1995. Khmer Asian Friendship Society (KAFS) was set up and registered with the government. The goal is to serve the poor people in the rural areas by pursuing the following objectives:

•To reconstruct Cambodia through village development;
•To cultivate friendship and strengthen solidarity among Asian Countries; and
•To promote understanding of Asian Culture.

Since then, KAFS has made remarkable result in helping and supporting rural people to alleviate their poverty and improve their likelihood.

1. 37 Kindergarten and Primary School buildings together with 9 toilets have been constructed.

JAFS から支援を受ける学校の校舎建設について先生や生徒たちに説明するチョン氏＝カンボジア

2. Loan Credit Program: The total loan has increased from an initial fund of USD40,000 to around USD450,000 through interest accumulation, and this fund is now being used within 55 villages.
3. Clean Water Supply: 445 wells were provided
4. Foster Children: There are 207 Foster Children having been supported.
5. Other activities such as International Friendship Camp, Cycle aid, free haircut, free classes for basic foreign language, tree plantation, emergency aid, etc.

My future plan of activity

High economic growth of around 7% per annum enables Cambodia to graduate to lower middle-income country; economic growth base has been further diversified; poverty rate has been reduced to below 10%; and income gap among the people has been decreased. Though, there are still of a lot of works to be done. Future plan of activities is as followed:

1.Strengthen local chapter. Despite the fact that each chapter has financially dependent's mindset to JAFS and NGOs workers are not business people, and more spending oriented, they shall be moving to more self-reliance by creating some income-generated activities;

2.More networking locally and regionally; by engaging more professionals and business people in regards of expertise and financial support.

3.One AFS foundation/common fund shall be established with chapters' contribution in order to support community's projects and networking activities.

4.Orientation to more human capital development.

JAFSに育てられスラムの子支援

「40周年」に寄せて②

グラム・セワ・サン&AFSナグプール会長（インド）
ビシャール・フィリップ・パランジャペ

インドの慈善団体グラム・セワ・サンは、1993年に私の父、故フィリップ・A・パランジャペによって設立され、彼が前会長でした。政府に登録され、ナグプール市から社会と教育に関わる団体の認証を得ています。主にスラムや貧しい村の人々のための持続可能な開発に貢献しています。

私はグラム・セワ・サンとAFSナグプールの会長です。母、妹、妻という小さな家族で暮らしています。父は病院の研究所で働いていました。また貧しい人々のためにソーシャルワーカーとしても働いていました。多様で優れた人脈があり、スラムや村での事業関連プログラムのたびに何度も、私を一緒に連れて行ってくれました。私は彼を観察し、学び取ろうとしました。

ある日、父は、JAFSとAFSの創設者兼事務局長である村上公彦牧師に会いました。父は、村上氏が常にアジア諸国に住む人々を助け、彼らの向上のために働いていることを知りました。インドを訪れるといつも、起こっている問題について話し合っていました。当時、インドの主な問題は非常に深刻な水不足で、彼はいかにして安全で清潔な飲料水を得るかに取り組んでいました。村上氏はJAFSを通じて資金援助し、多くの地域で生活の質向上のために井戸を掘り手押しポンプを設置してくれました。

父は私に、親友である村上氏やJAFSの皆さまを引き合わせ、またナグプールのチャイルドアカデミー事業を紹介しました。彼らとその事業を知ったことで触発され、私はソーシャルワーカーとして人々を助けることを決めました。

また村上氏は私に、大阪での第2回アジア・ユース・サミット（AYS）への参加を勧めました。私にとって初めての若手リーダープログラムでした。ここでリーダー力と技術を学び、その全てが今、貧しい人々を助ける私の仕事や事業に生きています。

インドに戻り、私はスラムや村の人々、特に子どもたちのために働き始めました。また、若手リーダーとして働くことで、多くの組織との関わりも持ちました。私は若者を訓練して、彼らがまた人々を助けることができるようにリーダー資質を教えました。スタッフの皆さまやAYSでお世話になっている渡部高明氏がインドのナグプールを訪れ、私の若手リーダープログラムを何度か支援してくれました。

私の仕事ぶりを見て、JAFSの皆さまが、ナグプールとガッチロリで第2・5回のAYSを開催する機会を私にくれました。そしてその後も、第3、4、5、6回のAYSにも参加や主催の素晴らしい機会を与えてくれました。

すべてが順調に進んでいましたが、13年10月17日、父が心不全で急死しました。親の死にうまく対処することは、私にとって非常に困難でした。予期せぬ父の死で、私の家族は動揺しました。そのときJAFSは多くの点で私たちを支援してくれました。妹リニの看護学校就学を助成してくれました。JAFSに参加できて幸運です。人々はとても協力的で思いやりがあり、彼らが大好きです。JAFSは今では私の家族です。

村上氏はいつも私の勤勉さと能率をほめてくれ、スラムの子どもたちのために私のセンターで「チャイルドアカデミー・ナグプール」の事業を引き継ぐよう頼みました。今ではアカデミーに60人の子どもが登録されており、JAFSの里親さんは、この貧しい子どもと家族の持続可能な発展を手助けすることにより、アカデミーを支援してくださっています。

また、私たちはグリーンスカウト運動も始めました。モットーは「地球規模で考え、地域で行動する」ことであり、今後はこの運動の取組みを増やしていきたいと思います。

19年1月4日、私はラトラム市の美しい女性シェファリと結婚しました。彼女は数学の教師をしており、現在、英文学の修士課程で学んでいます。また、チャイルドアカデミー・ナグプールに非常勤講師として関わり、成績が劣る生徒のための補修クラスを担当して理解を助けています。

私は全てのNGOをもっと組織的につなぎ、地域に役立つ情報や革新的アイデアを共有できるようにする計画をしています。

私自身は子どもたちの教育に関わる取組みに関心があるので、将来はスラムや村に学校や教育センターをつくり、より良い未来のために良い教育を提供することを計画しています。私の活動が、地域がより良い暮らしを営む一助となることを願っています。

（翻訳：JAFSスタッフ　川本　裕子）

Vishal Philip Paranjape

President of Gram Sewa Sangh & AFS-Nagpur, India

チャイルドアカデミー・ナグプールで子どもたちに話す
パランジャペ氏＝インド、マハラシュトラ州ナグプール

Gram Sewa Sangh was established by the founder member late Mr. Philip A. Paranjape in the year 1993. He was also the former President of Gram Sewa Sangh which is registered with the government of India as a charitable society and trust under MH/874/93 Nagpur. It is a social and educational trust. It mostly works for slum and poor village people for their sustainable development.

I am Mr. Vishal Philip Paranjape, President of the Gram Sewa Sangh/ AFS – Nagpur, India. I live in a small family with my mother, sister and wife. My father Late Mr. Philip A. Paranjape used to work in Laboratory in Mission Hospital. He had worked as a social worker too for the poor people. My father had a good, diverse network of people. Many times he took me with him whenever he organizes any program related to the project in slum or village areas. That time I used to observe and try to learn from him.

One day my father met Rev. Dr. Kimihiko Murakami Sensei, founder & executive director of JAFS and AFS. He came to know that Rev. Dr. Kimihiko Murakami Sensei always help people living in Asian countries and works for their betterment. Whenever he visited India, he used to discuss about the issues that are happening. That time the major issue in India was the lack of water which was a very serious issue and he was working on how to avail safe and clean drinking water. He brought the sponsorship through JAFS and got the wells dug and hand pumps installed to improve quality of life for many communities.

In the year 2010, my father introduced me to Rev, Dr. Kimihiko Murakami Sensei and Ms. Kyoko Ariyama, JAFS who was a best friend of him and also the project in charge of Child Academy Nagpur at present. After knowing about them and their work I got inspired by them and decided to help people by being as a social worker.

In the year 2011, Rev. Dr Kimihiko Murakami Sensei recommended me to attend 2nd AYS which was my first youth leadership program held in Osaka, Japan. Through that program I got to learn all the leadership skills and abilities which I am using now in my career and projects to help poor people.

When I returned back to India I started working among slum and village people especially with the children. I also got engaged with many organizations by working as a youth leader. I trained some youths and taught them the leadership qualities so that they can also come forward to help people. Ms. Sumiko Tanaka, Mr. Yokoyama Kohei, and Mr. Takaaki Watanabe visited to Nagpur, India and supported me several times for the youth leadership program.

Because of my dedication towards work, Ms. Junko Ohara, Vice – President of JAFS and Ms. Sumiko Tanaka, Former Deputy Director of JAFS gave me the opportunity to organize 2.5 AYS in Nagpur and Gadchiroli and after that they again gave me the wonderful opportunity to participate and host the 3rd, 4th, 5th and 6th AYS.

Everything was going smoothly but unexpectedly on 17th Oct 2013 my father met with a cardiac arrest and died. It became very difficult for me to cope up with the loss of a parent. My family got disturbed because of his unexpected death. That time JAFS supported us in many ways. They also supported my sister Ms Rini Paranjape by providing sponsorship for her education and nursing training. It is my good fortune to be a part of JAFS. The people are very supportive and caring. I love them all very much. JAFS has become my family now.

Rev. Dr. Kimihiko Murakami Sensei always admired my hard work and efficiency and asked me to start a project ‘Child Academy Nagpur’ in our centre for our slum children. Today we have 60 children registered in our Child Academy Nagpur. JAFS foster parents sponsors Child Academy Nagpur by helping these poor children and families for their sustainable development.

We have also started the Green Scout Movement in our place. The motto of which is “Think Globally, Act Locally” and I want to increase the work of this movement in future.

On 04th January 2019, I got married with a beautiful girl of Ratlam city Mrs. Shefali Vishal Paranjape. She is a Math teacher by profession and now she is pursing master studies in English Literature. She has also joined as a part time teacher in Child Academy Nagpur. She takes remedial classes for the weaker students of the academy and helps them out to understand the topic in a simple manner.

My plan is to connect all the NGOs in a more systematic way, So that they can share information and innovative ideas which will be helpful for communities.

As my personal interest is in working among children by educating them, so in future I am planning to build a school and education centers in slum and village areas to provide them good education for their better future.

I hope that my activities and actions will help the communities get a better life.

JAFS創立40周年を前に

④ 貧困支援は今…

伝統・コストを忘れたツケが…

家族総出で昔ながらの農作業風景だが、実際は、使う種や肥料が持続可能ではなかった＝4月5日、ネパール、シンドゥパルチョーク郡インドラワティ村

高価なF1種と化学肥料

JAFSは、農業による持続可能な地域づくりを目指して、ネパールで農業プロジェクトを始めました。各地域から選ばれて研修会に参加した22人のメンバーのうち20名が女性、2名が男性。圧倒的に女性が多く、女性の社会進出の遅れが問題であると思われたにもかかわらず、期待が持てるスタートでした。

しかも、彼女らの参加により、私たちがあまり気づいていなかった問題点が次々と浮き彫りになってきました。

ネパールでは水と土の栄養が不足しているため、栽培できる農作物に限りがあると、これまで聞かされていました。現地の状況を見て、その通りであるとも確信していました。

驚かされたのは、想像した以上に化学肥料を使っていることでした。そして遺伝子を組み換えたF1（一代交配種）の作物を栽培しているのです。

特に、水がある雨季の間に栽培する地域の人々にとって、一番重要な収穫物はトウモロコシです。4カ月～4カ月半の栽培期間を経て、人と家畜が食べるための1年分を収穫します。その後はヒエ（主に酒をつくる）と大豆をはじめとする数種類の豆を栽培し、水のない乾季は休耕（休作）です。ですから、主食用の農作物はまさにトウモロコシだけです。

苦労して収穫しても赤字

「実は……」

研修会に参加した女性たちが、話し始めました。

「今植えているF1トウモロコシは、おいしくない。そのうえ、すぐに虫がついて保存が大変なの」

残っていた種を見せてもらうと、虫よけ薬が付着しているピンク色の種でした。そして、驚くことに、その外袋には「食用ではありません。家畜の餌用です」と書かれていました。種によっては英語だけの表記もありましたが、多くは、現地語できちんと書かれていました。にもかかわらず、誰もその事実を知りません。その種を疑わずに皆が使っているのです。

「なぜきちんと見ないで使うの？」

と私が尋ねると、その答えは、

「みんなが使っているから」

「主人が買ってくるようになった」

「舅（しゅうと）に言われたから」

「仕方なく植えている」

種を選ぶ権限が、彼女たちにはないのです。

さらに詳しく話を聞きました。

F1種が出回り始めたのは20年ほど前。種屋に勧められて数人の村人が植えてみたら、原種のトウモロコシよりもすくすくと育ち、緑も濃く、これまでとは見違えるほどの畑になった。皆が絶賛し、徐々にその種をほぼ全員が使うようになったそうです。

高価な種を買えないため原種を植えると、「あそこの嫁は働き者でない」と怠け者のレッテルを張られ、肩身の狭い思いをさせられるといいます。

こうして皆がF1種を使うようになり、さらに、化学肥料を足しはじめました。言われるままに農作業をしてきたというのです。

ここからが今回のテーマです。なぜこうしたことが貧困につながるのでしょうか。

遺伝子組み換えの是非は別にして、F1の技術は世界に広く普及しています。これ自体が悪いわけではありません。ただし、F1株から採れた種は遺伝子形質が「先祖返り」してさまざまに分かれてしまうため、翌年に畑にまく種子として使えません。毎年、新たな種を種屋から買わなければならず、少なからぬ費用がかかります。

トウモロコシを栽培して2万㍑の収益を得るのに、どれだけの支出が必要かを洗い出してみました。F1の種、化学肥料、耕す際の牛や機械の借り賃、人件費など全て足すと2万5千㍑となりました。5千㍑の赤字です。苦労して植えて育てて収穫して結局、マイナス収益の繰り返しを行っているだけなのです。

その現状に、今回の研修会で費用の洗い出しをするまで、誰も気づいていなかったのです。もし、女性たちが声を出すことが容易にできていたら、このようなことにはなっていなかったかもしれません。

女性を苦しめる暴力も招く

ネパール地震の際に緊急支援に来ていたインド人に「生理用ナプキンは配布しているのか？」と聞かれました。パッドマンのおかげで、支援の際に生理用ナプキンを配布物資として入れる必要性が認知されたのです。（しかし、現実には、地震のゴミが多量に出ている中、ナプキンを配ってゴミをさらに増やすことができなかったのと、ほとんどの人が紙ナプキンの使用方法を知らなかったので、配布していないことを説明して納得してもらった）

本会でも、ネットワークセミナーの折に、インドのバッサガレ博士から、生理小屋で過ごす女性についての問題に関する報告を受けました。本誌でも、ネパールで展開している布ナプキン普及事業を取り上げてきました。

民族性や土着の考え方を100％排除することは、南アジアではまだまだ難しいのが現状です。

しかし、女性自身の尊厳の変化により、女性も男性もお互いの考えが変わってくれれば、「ダウリー」と呼ばれる結婚時の高額な持参金と関係する暴力や殺人などといった理不尽なGBV（Gender Based Violence＝社会的性差に基づく暴力）をなくすきっかけにつながります。負の連鎖を断ち切ることは明らかであると考えます。

× × ×

2015年の国連サミットで採択された持続可能な開発目標（SDGs）の目標1は「貧困をなくそう」です。宣言文の「End poverty in all its forms everywhere」は「あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ」と訳されています。貧困のない社会にすることがすべての大前提であることがうかがえます。

JAFSは、良質の水を得られないで苦しむ人々に井戸を贈って貧困をなくすことをめざし、地域の自立を支援してきました。貧困の原因は、慣習や元々の地理的条件など様々です。水を起点とした貧困からの脱却はもちろん、多く人々にとって有益ですが、それと併せて、GBVが大きな影響を与えていることを感じます。

1本の映画から変化の波

「パッドマン　5億人の女性を救った男」というインド映画が今冬、日本で公開されました。見た方もいらっしゃると思います。

貧しくて生理用品が買えず不衛生な布を使っていた妻を見た夫が、女性の大変さを改善しようと思い立ち、パッド＝生理用品を安く大量生産できる機械を発明する物語です。インドで実際にあった話をもとにしています。

南アジアでは、彼のパッドの普及とともに、生理に対するケアの支援が増えました。これまでタブーとされ、女性が声を上げなければ耳を傾けてもらえてなかった問題に対して、大きな波が訪れたといえるでしょう。

例えば、南アジアでは、生理中の女性が「汚れている」とみなされ、家族と分かれて別の小屋に隔離されるなどといったことが今も行われています。こうした日常生活阻害の実態も、本誌で紹介してきました。

「女性だから」「嫁だから」という根強く残るジェンダー不平等が、貧困に深く関係していることを感じないではいられません。

（JAFSスタッフ　熱田 典子）

＝おわり

われらJAFSの仲間たち

地区会・エリア紹介 ①

創立40周年を迎える JAFS の屋台骨を支えてくれているのは、関西をはじめ全国各地にある地区会やエリアなどの国内組織の皆さんです。それぞれ歴史と伝統を持ち、創意工夫を凝らしたさまざまな活動を繰り広げています。ふだんなかなかお伝えする機会がないそのプロフィールを、本誌に届いたお便りでご紹介します。

史跡ウォークでわが街発見

JAFS高槻

IAFS高槻は、ぞうすいの会として2009年にカンボジアに露天式井戸一基を贈った後、しばらく休眠しましたが、息を吹き返して16年から再度、めざましく活動しています。

西国街道が貫通する高槻には、芥川宿や高山右近などの歴史遺産が街角に山ほど埋もれています。「これだ！地域活動はわが街の発見から」と、まず自分たちが魅了された右近や隠れキリシタンの史跡を訪ねるウォーク・シリーズを実施＝**写真上**。右近研究家の先生の講演会とぞうすいのコラボは人気でした。

「アジアンホームパーティー」＝**同下**＝は、いつの間にか存在感を増す外国籍のお隣さんとどう付き合うか。将来のコミュニティのあり方も考えながら模索しています。

3本目の柱は、摂津峡という恵まれた自然環境に建つ音楽堂を会場に、クラシックと蛍（ほたる）観賞のコラボなど開き、新しい会員層を広げており、また市の公益団体の行うフェスタなどにも一員として参加、新メンバーの獲得、PRにがんばっています。地域活動には、従来のJAFSの活動を別な視点からさらに深めることができるさまざまな可能性があると気がついています。

（JAFS理事　齋藤 かおる）

多彩な催しで井戸寄贈・教育支援

JAFS第7エリア

JAFS第7エリアは、奈良、和歌山、三重の3県と大阪府の八尾、東大阪両市の、大変広域にわたっているエリアです。

2月の「御竹送りウォーカソン」、3月の「チャリティライブ生駒」＝**写真**＝、4月の「お花見の会」、8月の「生駒どんどこ祭り」、11月の「紅葉を愛（め）でる会」、そして随時開催される「雑炊・増水・贈水の会」などの定例活動を行っています。

また、活動報告会、チャリティ歌声サロン、国際交流等、多種多様な活動もしています。

これらの活動でちょうだいした寄付金で、インドに井戸を贈ることができました。また、現在はアジアの子どもたちの教育支援にも力を入れています。

老若男女が集い、それぞれの得意なところを持ち寄り、楽しさも、大変さもみんなで共有しながら、活動を続けています。

今、一番の悩みは、高齢化が進んでいること。今後は、若い人にも声かけをしながら、会員増強を図っていきたいと思っています。

（JAFS会員　山田 穂積）

ネパールのバイオガス支援

寝屋川地区会

大阪府の寝屋川地区会では、今年5月に「第49回ねやがわぞうすいの会ティーサロン」を開催し、席上、今年も、JAFSがネパールで行っているバイオガスプラント建設事業への寄付を手渡すことができました。このバイオガス寄付は、私たちの地区活動の原動力にもなっています。

高齢化が日本の社会問題であるように、寝屋川地区会の世話人や会員も、高齢化や老々介護で活動の硬直化に陥っています。市内に住む若い人たちにも海外支援活動の魅力を発信するため、市内の各種サークルや活動団体との共同イベントに積極的に参画し、展示やチャリティー模擬店などで地区会の存在をアピールしてきました。

しかし、会員の掘り起こしや新規会員に結びついていない課題があります。

寝屋川地区が含まれるJAFS第2エリアでは、以前から地区間の結束が強く、枚方地区とは相互に協力し合っています。「北河内緑とふれあう会」では月に2回、農園が情報交換の場になっています。今後も地域に根ざした地道な取り組みを楽しく続けていきます。

（寝屋川地区世話人　笠谷 正博）

月例会の卓話で活動をＰＲ

河内長野アジア友の会

大阪府の河内長野アジア友の会は、２０１８年１月20日に河内長野市ラブリーホール・ホワイエで発会式を行い、スタートしました。参加者は約70名でした。

活動の第一歩として月例会の開催を決め、第１回を同年３月25日に河内長野市ノバティホールで開きました。最初の卓話はＪＡＦＳと関係の深い、スリランカ出身で在日33年の樋口バーギャさんにお願いしました。また、ＪＡＦＳの村上事務局長の「ボランティア活動の意義」や、柿島事務局次長の「ＪＡＦＳ近況報告」を聴きました。11名参加し、まずＪＡＦＳの活動や理念を知ることから始め、その輪を広げていくことを考えました。

２回目の月例会は４月23日。５月例会まで、ＪＡＦＳと関係が深い留学生や関係者を卓話者に招き、６月からは、地域で活動している著名人を卓話者に招きました＝**写真**。ＪＡＦＳの活動を理解してもらうことと、その活動に協力もらうことを目的としました。

定例会は本年２月まで毎月開きましたが、５月からは奇数月に開くことにしました。問題は、毎月の出席者が十数名と少ないことです。この輪を何とか広げたいと考えています。地域に協力者を増やすことは、ＪＡＦＳの活動支援に直結すると考えています。

また、毎年開催されている「ボランティアフェスティバル」（河内長野市立市民公益活動支援センター主催）に参加し、展示コーナーでＪＡＦＳのＰＲとアジアの物品の即売をしました。

さらに、「瀬田敦子ピアノ・チャリティコンサート」を11月29日（金）午後７時から、河内長野市ラブリーホールホワイエで開催します。多くの市民に参加してほしいと願っています。

（会長　白井 春夫）

音楽会・ウォークで国際交流

なにわ南地区会

なにわ南地区会は　水に恵まれない国々の住人に長年にわたって井戸を提供しています。おかげさまで、ＪＡＦＳが40年間に各国でつくった井戸約２０００基のうちのいくつかを提供できました。

私たちのグループは、大阪市中南部の阿倍野、天王寺、住吉、東住吉、平野、浪速、西成の各区を中心として活動しています。

最近では２０１７年３月に、阿倍野区・阿倍野区民ホールで、タイ国の故プミポン国王を追悼するチャリティー・ピアノコンサートを、私たちの地区が主体となって開催させていただきました。先生の指導のもと、タイから学生ピアニストが参加して、優れた曲目と連弾もあり、多くの聴衆を魅了しました。収益金の一部は、井戸の設置に寄与しています。

６月には　住吉ウォークを企画しました。カンボジア、タイから外国人が初めて参加しました。全員が神社に到着して鳥居をくぐり、手水（ちょうず）の所で作法を習いましたが、外国人は初めての体験でびっくり。また、昔、境内には大きな寺があったと言われ、信じられないことばかりだったようです。

「なくそう貧困。命の水を！」の目標の下、今、安全な水を必要としている６億６千万人のために、行事を通して尽くさせていただきたく存じます。

（ＪＡＦＳ会員　中西 豊次）

「何のため」を支援者と共有

なにわ西地区会

大阪市のなにわ西地区会ではインドの学童２名の支援と同国の女性自立支援（養鶏事業）を掲げ、篠塚達朗地区長らスタッフが、ウォーク案内人の沖本然生先生と一緒に頑張っています。

イベントのためのイベントではなく、何故活動しているかの目的意識が大切だと考えています。幸い、スタッフや関係者の意識が高く、互いに協力しながら活動してきました。

昨年度は沖本先生のウォーク＝**写真**＝を４回、篠塚さんのウォークを１回、天神祭の鱧（はも）鍋パーティーを１回行い、前述の支援にこれまでの最高額の十四万円を贈ることができました。

また、ウォークなどに参加いただいた方々へは、御礼を兼ねながら支援の内容をお知らせしています。ウォークなどに参加いただいて楽しんでいただいていることが国際貢献に役立っていることを、ご理解いただくのも大切と考えています。

今後とも、「何のために活動しているのか」を、地区会スタッフと共有して努力していきたいと考えています。

（副地区長　風早 正夫）

フィリピン映画祭で「セカミズ」上映

フィリピン・パナイ島のパンダン水道パイプライン・プロジェクトをモデルにして製作されたた映画「セカイイチオイシイ水　マロンパティの涙」涙＝**6ページ参照**＝が７月11日、マニラでの日本映画祭で上映されました。

ＪＡＦＳの湯川剛副会長が、当時の横井克己会長と協力者たちの熱い思いに心を動かされ、ＪＡＦＳ40周年を記念して映画化したものです。マニラの映画祭会場には、当時のメンバーをはじめ、プロジェクトを知る人々ら30名近くが集まり、一般の参加者とともに映画を見ることができました。

今年で戦後74年ですが、戦争はフィリピンの人々にとっても忘れられないつらい記憶です。約20年前に行われたプロジェクトの映像が流れると、フィリピン人も日本人も涙が止まりませんでした。互いにどうすれば地域のため住民のために力を合わせることができるのか、本当に試行錯誤の日々だったのです。

上映後、湯川副会長と主演のアミー役のミエル・エスピノーザさんらが舞台に立ち、会場からの質問に答えました。

来場者の中にはフィリピン日本両方にルーツを持ち、両国のかけ橋として何かしたいと強く思っている人が多くいましたが、ほとんどの人がこのプロジェクトを知りませんでした。映画をきっかけに自分の家族、友人、地域からボランティアに目を向け、行動していく一歩になればと強く感じました。

９月から一般公開が始まりました。ぜひ、多くの方が映画を見て、ボランティアとして力を貸してくださり、活動の輪が広がっていくことを願っています。

（ＪＡＦＳスタッフ　岡本 佳子）

※８月30・31日に大阪市で試写会を開催し約500名が鑑賞。原作者・小嶋忠良氏から制作秘話の紹介もありました。

大阪・奈良で第6回アジア・ユースサミット

「多様性に富むまち」めざし討論

10カ国の高校生　村おこしの現場で研修も

第6回アジア・ユースサミット（AYS）を8月17～22日、大阪と奈良で開催し、10カ国（日本、インド、インドネシア、カンボジア、スリランカ、タイ、中国、ネパール、パキスタン、ベトナム）の高校生および案内役、ボランティア総勢81名が参加し「地域をよくするプロジェクトを創ろう～多様性に富んだまちづくりをめざして～」をテーマに討論と交流を深めました。

参加者たちは、本事業のテーマをもとに事前に地域の課題を調査して解決方法を地域の中から調べ、「地域をよくするプロジェクト」として作りあげ、当日、プレゼンテーションプログラムとして発表しました。グループディスカッションでは、AYS自体を多様な課題を抱えた地域と想定し、その課題に取り組む村という設定で5つのグループに分かれました。多様性に富んだ村づくりをしていくためにはどうすべきか、それぞれのプロジェクトから事例を並べていきながら討論し、最終的に多様性に富んだ村づくりのための政策という形で各グループが発表をしました。

フィールド研修は「持続可能な村づくり」に取り組む奈良県東部の曽爾村（そにむら）で行いました。農林業が盛んで豊かな自然・歴史に恵まれた高原の美しい村です。ここも過疎化が大きな悩みですが、移住してきた地域おこし協力隊の青年たちと役場や住民の「思い・行動」が連携して、明るい未来を描きつつあります。

参加者たちは、協力隊が活動する漆工芸とトマト栽培を体験し、そこで働く人から、村おこしにかける思い、価値、課題などを話してもらいました。トマトファームでは農業が好きな青年の挑戦を知りました。実際に収穫もさせてもらい、そのトマトが合宿の夕食を彩りました。

最後に曽爾高原ファームガーデンを訪れ、自慢の野菜や地域で開発した様々な製品に出会うことができました。「持続可能な村づくり」を実践している方々との交流は、将来何かの形で生かすことができると思えた一日でした。

当日は心配した雨もあがり、午前中に訪れた東大寺では鹿の歓迎を受けました。千年かけて築いた人と鹿が共生する環境の大切さを実感しました。

グループディスカッションの最終発表と曽爾村で感じたことなどを各グループのリーダがまとめ、多様性に富んだ街づくりの最終政策を宣言文として発表しました。「私たちAYS参加者は、自然破壊などの環境課題、女性差別、防災、高齢化などの社会課題、シャッター街などの経済課題、少子高齢化などの人口の課題などに対して、解決のための企画をし、それらを解決するものや方法を作り、必要なインフラを増やしながら課題への理解を広め、人びとの協力を得ながら課題を解決していきます」

今回の大きな成果の一つは、6人のユースリーダーの活躍でした。うち、高校生のとき参加した数名は、サポートする側として、今回の企画が始まった時から関わってくれました。仲間を集めて、自分自身がAYSを通して成長できた経験を皆で分かち合いたいと盛り立ててくれ、ユースの手によりプログラムが運営できました。

これまでのAYS参加者が友人に内容をシェアしたことで、活動に関わるユース仲間が増えてきた国や地域もあります。

私たちJAFSは長年、中学生、高校生たちをインドの農村に送ってきました。そこで彼らが得たものが、その後の進路、人生そのものに大きな影響を与えてきました。そこで、より多くの高校生が海外へ目を向ける活動に参加する方法はないかと考え、この国際会議を始めました。

参加者らが将来、本当に国や地域の代表として国際会議に参加し、社会を動かせる一員になってほしいと願って「サミット」と名付けています。持続可能な社会づくりに向けて地域の課題を見る「視点」、解決方法を考える「頭」、実践する「力」を持つ次世代のリーダーを育てることが目的です。

そのために「地域を良くするプロジェクト」をつくります。その過程で多くの高校生が地域や自治体の人と話し、意見を聞く機会を得ています。このように、国境を越えて意見をシェアできることは、大きな財産になるはずです。

多くのご支援に感謝

この事業は、令和元年度外務省NGO事業補助金と公益財団法人三菱UFJ国際財団の助成と企業、団体、個人の寄付から実施できています。これまでも毎回、多くの企業、団体、個人の支援者に支えられ、第6回を迎えることができました。

実行委員は、月1～2回集まりプログラム内容、「地域を良くするプロジェクト」の審議から移動手段、宿泊、参加者の送迎などプログラムの進行に支障がなく動けるよう相談しながら計画を立て、当日動いています。料理グループのボランティアは、宗教によって異なる食習慣に配慮して牛肉、豚肉ぬきなど献立を考え、早朝から深夜まで準備、調理に追われます。このプログラムの意義を感じ、食べ盛りの若者たちの健康を支えています。

こうした多くの皆さまのご支援、ご協力に、改めて感謝申しあげます。

（AYS実行委員　金剛一智、JAFSスタッフ　熱田典子、横山浩平）

苦手な英語が通じた／ユースリーダーとして達成感　参加者の声

明松 遼（大阪府立佐野高校3年）

初めは英語に自信がなかったが、日が経つにつれ話せるようになった。良い経験になる以上に、外国や日本の初対面の人と仲良くなって本当に楽しかった。ごはんもおいしかった。

小牟田純伸（大阪府立松原高校2年）

授業では学べないことを学べた。国による違いや、言語の壁の中で結論を一つにまとめることを学んだ。言葉以外でも、特に音楽を通して人と人は通じ合えるんだということも分かった。

森河空音（大阪府立松原高校2年）

外国や日本の子と、仲良くなれた。宿でアジアの子に布団の敷き方など英語で説明し、英語は苦手だけど通じてうれしかった。言葉で困ったことも含めとても楽しかった。

Ismail Asif（パキスタン）

楽しく興味深い経験だった。日本など他国の多様な文化にも触れられた。

Aishwarya Policepatil（インド・コスモニケタン学園）

コスモニケタン学園から初参加。とても素晴らしかった。他の国の人とどうコミュニケーションし、議論するかなどを学ぶことができた。

長尾 美保（ユースリーダー）

4回目の参加。過去2回は高校生参加者として、今回は初のユースリーダーという立場での挑戦でした。ユースリーダー自体初の試みで、手探りの非常に大変なものでした。頑張れたのは、過去2回の参加からたくさんの学びを得ることができ、今回もまた新しいことを学べる、学び取って来るぞという強い気持ちがあったからでした。

どうすれば参加者たちにとってより良い環境を作れるか、どうすれば少しでも円滑にプログラムを進められるかなど、試行錯誤を繰り返しました。忙しいけれど、とても魅力的な仕事でした。参加者たちの成長を一番近くで感じることができました。自分たちの行動次第でプログラムを円滑に進められることも魅力の一つでした。

なんとか無事、全プログラムを終えることができ、やりがいと達成感を感じています。ユースリーダーの仕事を通して、裏の裏まで考え行動する力や決断力、行動力などを身につけ、準備の大切さ、結束力や柔軟な思考力の大切さ、周りをうまく動かす方法など本当に多くを学ばせていただきました。

みなさんのおかげで井戸ができた村

安全で衛生的な水を確保できないアジアの地域に井戸ができて生活基盤が整い、自立へ一歩踏み出せるようになりました。ご寄贈くださったみなさまに感謝申し上げます。

なくそう貧困。命の水を！

ご寄付には税の優遇措置が受けられます

井戸の寄贈にご協力ください。あなたの力がアジアの人々の命を助けます。ご寄贈者に完成報告書、写真、パネル写真を届け、現地の井戸に、ご寄贈者のネームプレートを設置します。

■井戸１基の建設に必要な費用■（2018年4月現在）

インド＝60万円　フィリピン＝33万円
カンボジア＝28万円　スリランカ＝22万円
ネパール＝17万円（パイプライン＝25～150万円）
バングラデシュ＝浅井戸22万円、深井戸55万円

※５年間のメンテナンス費、現地管理費を含む概算です。※現地資材費高騰により費用を１割増に変更させていただきます。ご理解ご協力をお願いいたします。

■お振込み先■　・郵便振替 00960-6-10835　アジア協会アジア友の会
・三菱UFJ銀行大阪中央支店 普通1968711 公益社団法人アジア協会アジア友の会

詳しくはアジア協会アジア友の会 ☎06－6444－0587へ

ネパール

水が得られ安心して復興できる

【寄贈者】藤田信義 様

発展から取り残された村で、道は未舗装で狭いため、郡都チョータラから10km圏内にありながら１時間以上もかかります。2015年の地震では住民のほとんどが家を失い、現在ようやく再建が始まっています。地震前は30分で得られた水が枯渇してしまい、山向こうの水源から細いパイプを渡し、１つの水瓶を２～３時間かけて満たし、命をつないでいました。日本のJICA支援の水供給計画もこの村は対象外でした。この水場の完成のおかげで安心して復興に取り組むことができます。

シンドゥパルチョーク郡インドラワティ村第２区
受益者：51名（７世帯）
井戸形式：水道パイプライン

地震で枯渇した水源の代わり

【寄贈者】JAFS尼崎井戸の会 様

シンドゥパルチョーク郡インドラワティ村第２区
受益者：36名（６世帯）
井戸形式：水道パイプライン

標高1500mの山間の村。郡都チョータラに隣接していますが、幹線道と反対側にあり少数民族タマン族のため、発展から取り残されています。2015年の地震では村人のほとんどが家を失い、現在ようやく再建が始まりました。地震で今までの水源が枯渇し、山向こうから引く細いパイプの水で400人以上が暮らします。水瓶を一杯にするために女性や子どもは１日費やし、仕事も学校にも通えない状態でしたが復興の足掛かりができました。良い地域になるよう皆で力を合わせます。

ネパール

水くみ時間短縮で仕事ができる

【寄贈者】山本幸雄 様・角田圭一 様

幹線道路から離れた山間の少数民族の村です。2015年の地震でほとんどの家が倒壊し、やっと再建が始まったところです。今までの水場は地震で枯渇し、遠い山から引いたパイプから得ていました。水瓶を一杯にするには２～３時間かかり人が集中するため、１日の大半を水くみに費やす有様でした。近くに水場ができ、女性は仕事ができ、子どもたちは学校へ行けるようになりました。水は命の素、生活そのものです。水の確保によって村の発展と生活改善に取り組むことができます。

シンドゥパルチョーク郡インドラワティ村第２区
受益者：50名（６世帯）
井戸形式：水道パイプライン

近場に井戸ができた

【寄贈者】(株)グローアップ　サンクス＆ハピネス 様

シンドゥパルチョーク郡インドラワティ村第２区
受益者：40名（５世帯）
井戸形式：水道パイプライン

標高1500mの山間の村で開発が遅れています。2015年の地震でほとんどの家が倒壊し、最近ようやく再建が始まりました。村人は農業に従事していますが今までの水源が地震で枯渇し、遠くの水源から引く水に400人以上の人が頼っています。農業は衰退し、若者は村を離れていきます。女性や子どもが水くみに１日を費やす生活が続いていましたが、近場に井戸ができ日々安心して生活を送ることができます。これからは、村の発展と生活改善に向けて進むことができます。

支援を励みに自立発展をめざす

【寄贈者】JAFS姫路 様

幹線道路から離れた標高1500mの高地の村で、昔の生活をする山間民族タマン族の取り残された地域です。2015年の地震でほとんどの家が倒壊し最近ようやく再建され始めました。従来の水場は地震で枯渇し、遠くの水源から細いパイプで送られる水に400人以上の命が保たれ、１日のほとんどを水くみに費やす毎日でした。この水場によって皆様が私たちのことを気にかけ支援してくださることに心より感謝しております。これを励みに自立し村の発展に尽くしてまいります。

シンドゥパルチョーク郡インドラワティ村第２区
受益者：30名（５世帯）
井戸形式：水道パイプライン

日本人講師の松川さん（右端の男性）から有機堆肥の作り方を学ぶ実習
＝８月19日、ネパール・シンドゥパルチョーク郡インドラワティ村第10区

水インフラを農業に生かせ 堆肥づくりにも新たな工夫

ネパールのプロジェクト地

本誌前号でお伝えしたように、ネパール、シンドゥパルチョーク郡インドラワティ村第10区（旧ボテシパ村）では、震災復興プロジェクトとして、大規模な揚水システムの建設が着々と進んでいます。川辺の井戸水をくみ上げ、８００ｍ以上の山頂まで４ヶ所のタンクを通して徐々に水を揚げ、山頂から各集落、約1千世帯5千人に行き渡るよう分水します。雨季には道の状況が悪く、車で資材を運ぶことや作業が困難なこともありました。しかし、村人たちは水が来ることを願い、懸命に作業に取りかかっています。

村では現在、トウモロコシやヒエ、大豆を主に家畜と村人が食べるためだけに栽培しています。村人はこれまで、農業の技術指導を受ける機会がありませんでした。天水のみで作物を育てるこの地域に水が来ることで、新たな作物を栽培できる可能性が広がります。水インフラシステムの構築とともに農業基盤を整えるため、村内各集落から選ばれたリーダーに、1回目の農業研修を行いました。講師として日本から松川一人さんに来てもらい、9日間、21名が参加しました。

参加者はまず松川氏から、奈良県で行われている里山再生の活動や有機栽培の様子などを写真を通して学びました。自分たちのトウモロコシ畑の違いや、日本の農地についても知る機会となりました。また農作物を育てる上で大切な土や有機堆肥の話を聴き、実際に有機堆肥を作りました**＝写真**。これまで村人が行ってきた堆肥にひと手間加える方法を学び、早速自分の家でも実践したいと意気込んだ様子でした。

リーダーの多くは子どもを持つ母親です。子どもたちを含め、自分たちが食べる農作物は化学肥料を使ってよいのか、本当においしいと思う農作物を作ることや、自分たちの健康、地域の環境を守ることの重要性についても、今回の研修を通してリーダーたちへの気づきにつながりました。

今後も、さらに農業トレーニングとリーダー育成を行っていきます。リーダーたちが、率先して持続可能な地域づくりを行えるよう目指します。

（ＪＡＦＳネパール駐在スタッフ　中川 寛子）

36回目の「土水」新宮で開催

参加者から支えるリーダーへ たくましく育った子どもたち

皆さんは夏といえば何を思い浮かべるでしょうか。花火、スイカ、アサガオ、セミの声など、さまざまなイメージがあると思いますが、私にとって夏といえば土水です。今年で36回目となった「土と水と緑の学校」（以下、土水）ですが、私にとっては30回目の節目となる参加となりました。毎年８月に開催されている土水ですが、今年も８月５～10日に、小学３年生から中学３年生の75名の参加者と多くのボランティアの皆さんが和歌山県新宮市高田に集まって夏の１週間を過ごし、来年の再会を誓い合いました。

私が毎年土水に参加しているのは、土水でしか味わえない濃密な１週間を参加者の子どもたちや高校生以上のリーダー、ボランティアの皆さんとともに過ごす醍醐味だけではなく、高田の地での懐かしい顔ぶれとの再会や新しい人との出会いに加え、天候や出来事も毎年変わるために一度として同じ土水はないという一期一会感があると考えています。

私は、今年の土水でも本部ボランティアとして「海の日」プログラムでの船上監視を中心に、リーダーや高校生のジュニアリーダーとのミーティングを担当しました。ホエールウォッチングでは、ハナゴンドウクジラの群れや体長約20ｍという大きなオスのマッコウクジラを見ることができましたが、加えて、体長約３ｍ、重さ約１００kgという非常に大きなカジキを釣ることもできました。土水では２０１３年にもカジキを釣りあげているので今回は６年ぶりのカジキとなりましたが、ＴＶ番組などでしか見ることがないような大物に、子どもたちのみならず大人までもが大興奮となりました。ちなみに、そのカジキは船長さんにさばいてもらい、翌日には本部ボランティアで調理して参加者みんなの夕食になりました。非常においしかったです。

私がミーティングで関わった今年のリーダーたちは、例年以上に和気あいあいとしていました。初参加のリーダーは積極的に土水に関わり、それに応えるように経験あるリーダーが今までの知識や経験を伝えていくという雰囲気がありました。また、今まで参加者として土水に参加し、今年初めてジュニアリーダーとして土水に参加した高校生たちが、今までの参加者としての土水とリーダー側から初めてみる土水の違いに驚き、戸惑いながらも、それ以上にジュニアリーダーとして関わる土水を目一杯楽しんでいる様子を目の当たりにし、とても成長した姿を見ることができました。本当にうれしい気持ちでいっぱいになりました。

以前は、夏が来れば土水が始まるというのは当たり前のことのように思っていましたが、実は土水がこれほど長きにわたり毎年行われていることは非常に奇跡的なことだと、最近つくづく感じています。こんなに大きなプロジェクトが、重大なけがや事故もなく毎年開催されているのは、主催者の新宮市やＪＡＦＳの取り組みに加え、リーダーや多くのボランティアの方々のおかげであることを、改めて感謝しているところです。来年の土水も引き続き多くの皆様にご参加いただき、高田の地で再会できることを楽しみにしています。

（ＪＡＦＳ会員　赤嶋 崇
＝ニックネーム・みどろ）

親元を離れて初日にホームシックだった子も、最終日にはうんとたくましくなって笑顔があふれた＝８月10日、和歌山県新宮市

JAFSプラザ
国内活動

国内外の様々なイベントをHPに載せています。記事についてのお問い合わせはJAFSへ＝裏表紙にアドレス、連絡先

汗と笑顔の野菜づくりで次世代を育てる

大阪府の「JAFS北河内　緑とふれあう会」では、JAFS事業の一つである環境保全活動を地域で展開し、次世代を育成する活動を始めて10年になります。枚方地区の佐々木前会長のもと、人と自然に優しい無農薬有機栽培で野菜、果物、稲、ハーブなど様々な作物に挑戦してきました＝**写真上**。田植えや稲刈り、いも堀り、みかんの収穫には、ふだん土と緑にふれあうことの少ない都市部の子どもたちも参加しています。

10年前、私たちの活動に理解のある園芸会社の好意により、農地を借りることができました。しかし農作物栽培の生命線である「水」がありませんでした。当初は隣接する農家から分けてもらっていましたが、いつまでも迷惑をかけられないと、若者の協力を得て、みんなで井戸を掘りました。現在は太陽光発電で井戸水をポンプアップしています。

また「地域に緑を！」の取り組みでは、枚方市の御殿山（ごてんやま）神社に、農園でさし芽から育てた紫陽花（アジサイ）750本を、神社の氏子や地域の人たちと植樹しました。この取り組みが評価され、枚方市から緑化環境表彰を受けました。

今回、農園で育てた作物の販売収益や会員宅の庭木剪定で頂戴したお礼の積み立てから、ネパールの農業支援に寄付することができました。水の確保に悩むネパールの山村農家の、生産性の向上と安定的な生活につながることを願っています。

「JAFS北河内緑とふれあう会」のブログ（https://blog.goo.ne.jp/midori-hureai）では、活動の様子が閲覧できます。

（JAFS会員　笠谷 正博）

BBQパーティーで国際交流

大阪府・富田林地区の恒例行事として、今年もBBQ（バーベキュー）パーティを7月6日に開きました＝**写真右**。準備も楽しみの一つで、バーベキューコンロに炭を入れ火をおこすことから始まります。我々熟年も火をおこし、汗だくになりながら、お肉、野菜をどんどん焼いていきます。真っ黒に焦げた物でもビールと一緒に頬張りながら、参加者仲間と楽しい時間を過ごしました。またバナナを丸ごと網で焼いて食べてみましたが、より甘みが増しておいしいと皆に好評でした。

今回は新たに4名の参加者があり、フィリピン出身の方もおられたので、アジア協会のことをより深く知ってもらうため、フィリピンのパンダンに水道を引くためのパイプラインを設置した時の映像をビデオで見ながら、説明を受けました。アジア協会の国際的な活動に改めて感動しました。古い写真と断片的な映像の構成でしたが、当時の様子が良くわかり、厳しい自然の中、大勢の方の熱気と達成感が伝わって来て好評でした。その後も自己紹介などで交流を深め、楽しい時間を過ごしました。

アジア協会が10月で40周年を迎え、様々なイベントが予定されています。JAFS富田林地区としてもこの活動を支援すべく、地域住民の理解と協力のもと、古着などをバザーで販売し、また、アルミ缶収集による売上金をアジア協会を通じてネパールに学校を建てるために寄付しています。これからも皆で楽しみながら、長く活動を続けていきたいと思っています!!

（富田林地区代表　沖田 哲男、同地区役員　渡辺 治彦）

大人の「土水」、熊野の文化資源を学ぶ

青少年の健全育成と自然科学の実体験をめざして1983年から毎年開かれている「土と水と緑の学校」をサポートする方々を対象にして、「熊野塾」を3年前から始めました。「土水」の大人版とも考えられます。

熊野・紀伊半島には、古代から太平洋を基調とした黒潮・親潮文化と、森林渓谷の素晴らしい資源が存在しています。その生活文化等の実践的資料として、春夏秋冬の「祭事文化の実践」があります。これらの文化資源が、2004年7月に日本で12番目のユネスコ世界文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」として指定されました。この遺産は、世界一広大な約1万㎢の面積があり、紀伊半島全域の指定とも考えられます。

今年の熊野塾は7月14～15日、熊野那智大社「那智の扇祭り・火祭り」と熊野速玉大社「扇祭り」の2回目の見学でした。二十余名の参加をいただきました＝**写真右上**。

（新宮アジア友の会 顧問　中西 洋）

モーセの兄の子孫 コーヘンさん講演

エリ・コーヘンさんの特別講演会をJAFS創立40周年記念行事の一環として5月25日、大阪国際交流センターで、社員クラブ・法人賛助会共催、大阪国際フォーラムの後援を得て催しました**写真右下**。

交流会を持てたことは大変意義深いことでした。コーヘンさんは、元駐日イスラエル大使で、旧約聖書に登場するモーセの兄アロンの135代目の直系の子孫にあたります。聖書に親しんだ方なら、一生に一度は会いたい人でしょう。そのうえ、イスラエルと日本の歴史文化を探求し、神社の神と聖書の神の類似性を事細かに研究しています。真の親日家でもあり、日本人以上に日本を知る人です。ビジネス、政治においても、人脈や知恵深さにおいても、尊敬を集めています。今後、JAFSが、より一層の深い関係性を築いほしいものです。

今回、私が代表取締役を務めるエーゼル株式会社（エーゼルはヘブライ語で神の助けの意）が特別協賛としてお手伝いできたことを、神さまと皆さまに感謝いたします。

（JAFS会員　〆木 泰輔）

全国から86人が応募

JAFS40周年記念 作文コンテスト

JAFS創立40周年を記念した作文コンテストは、7月20日の締め切りまでに全国16都道府県から86人の応募がありました。

コンテストの課題は「アジアの未来――私の提言」。400字詰め原稿4枚以内で、18～25歳の若者が対象。応募者は北海道、東北、東京、東海、近畿、北陸、中国、九州在住の大学生、留学生、会社員ら。府県別では大阪府が最も多く44人。ついで兵庫県12人、東京都6人、京都府、奈良県各5人、千葉、神奈川、和歌山県各2人となっています。経済、文化、環境、貧困、教育、人権などアジアを取り巻く様々の課題についての意欲的な記述が目立ちました。

JAFSの萩尾千里会長ら9人の審査委員による選考を経て、10月5日に大阪市内で行われるJAFS 40周年記念式典で入賞者を発表。優秀賞の受賞者を表彰します。応募者、関係者の皆さん、ご協力ありがとうございました。　（作文コンテスト委員会）

新入会員ご紹介

ご入会感謝申し上げます。（敬称略・50音順）
2019年6月1日～8月31日

●社員会費
松浦正

●維持会費
安宅義人／荒川雄毅／岩田匡弘／置田義男／小菅八郎／志賀里世／島田一郎／鳥居建十／松本佳成／森茂昭

会費納入者、寄付・物品協力者

温かいご支援ありがとうございます。（敬称略・50音順）
2019年6月1日～8月31日
なお夏季・冬季募金へご協力くださった方につきましては、1年後の夏季・冬季に別紙で報告させていただきます。

●社員会費
新井和彦／有山京子／岩﨑準一／大麻豊／小山田宗弘／柏木道子／北垣俊一／暮部恵子／金剛一智／近藤眞道／眞田悦子／實清隆／清水茂實／末広真樹子／髙井準雄／内藤能／長尾貴美子／中西武雄／新田香織／根津千枝子／服部貢／福岡好嗣／福澤邦治／藤原道子／船戸康夫／古谷裕子／松本督／南野紀美子／森梢／森本匡昭／吉田郁夫／吉田幸子／吉田暢子／芳野徳洋／米田明正／渡辺治彦／渡辺秀規／渡邊瑠璃子

●維持会費
青木洋介／天野澄子／新井隆郎／荒川雄毅／板谷静夫・博子／一瀬由起子／伊藤雅子／岩田匡弘／植田直弘／上田裕美／魚森清恵／江川美知子／大木洋子／大須賀丕出子／大槻誠子／大山愛子／置田義男／尾谷孝子／小田辺朋子／貝谷嘉彦／蔭山征宣／風早正夫／片山真弓／金子文子／川崎千足／岸久子／桐間郁子／金敬姫／日下千代子／小泉好子／国領久子／小西勝人／近藤恵子／坂上やよひ／坂本美津子／崎野哲史／佐藤明吉／佐藤恵美子／佐藤冨美子／佐藤正明／塩谷真人／篠塚達朗／嶋崎貴行／島田一郎／清水泰尚／正法地真理子／澄川満喜子／関谷康子／髙岸弥生／高橋町子／竹中有香子／巽正憲／田仲拓二／田中守／田邊眞裕／谷野健・順子／丹治純子／辻本栄一／辻本智美／坪倉幸弘／出野聡司／寺山正道／豊田元彦／苗村登美子／中路信子／中谷誠／中村哲治／西尾恵美子／西村清美／西村秀明／西本悦子／橋本末子／濵﨑佳尚／日笠修宏／日阪栄子／久冨雅之／深田陽一／本田伸一／前川契子／前川純一／前野芳子／増田愛子／松橋和子／三浦寿子／三雲孝／水野礼子／三宅律子／森わか子／森長敬／森山涼子／矢野佳昭／山口幸子／山地和家子／吉田京子／吉田茂／Ramon Vedrell Gall／和田秀一／和田義次

●賛助会費
青木ヨシ子／荒木迪夫／粟野アツ子／安藤理恵／飯田稔／石川尾美佐子／石川忠義／板原操／市來伴子／伊藤エリサ／井上知紀／今宿有利子／上野泰子／植村史子／内田晶子／内野清子／嘗地道俊／戎野博太郎／岩典代／大門吉俊／大澤淑／大島直也／大林昌子／大山利子／岡田英原偉樹／大森文子／岡部雅也／沖本然生里子／岡部雅子／小川雄也／加藤繁生／加／香川八千代／樫原良／川勝江／鎌田公藤浩輔／金本秀紀／鎌田／川瀬真知子／鎌田直子／河合典／崎忠良／木原輝川村忠／川本裕子／北治／倉田節子／清原浩子／久保佑／小美野広行／近後藤朝子／駒井隆夫／利則／近藤湊藹／近藤十郎／近藤代子／坂田益紺野敏雄／酒井伸雄／坂久間純歌／坂手悦子／阪本美／佐藤仁／佐子／佐藤小苗／佐藤輝／佐藤仁／佐藤雅美／澤野真樹／設楽宏幸／品川壮／篠田京子／島田和幸／清水明子／末澤武司／杉本明子／鈴木直行／瀬田敦子／ソルギアタール／大仁孝太郎／高瀬規佐江／高橋温子／高浜久栄／高宮寿子／瀧川真紀／田中祥子／谷口辰雄／種井法子／辻本栄太郎／永井三千彦／中川佳子／永井博記／寺田真理子／永宮裕一／中永井伸介／冨松恭／山豊子／奈蔵知西貴子／中西佑介／中正明／西田愉子／橢崎しのぶ／難波／西山美菜子・／藤岡朋子／藤千晶・敦記／野川節子／能勢圭子／橋／西尾久子／西野修平／中美代子／服部本靖夫／橋本洋一／晶恵理子／濱口みど健史／服部美代子／鍋恵理子／林芙美子／櫻井紘どり／浜本耕／林温子／原／ニ明博／原京／広谷悦子／樋口美佐子／山本敏澤京子／藤田知子／藤原和子／藤原小春／細尾真生／堀江直／前田拓／柾本俊晴／真嶋克成／松並淳／松野光伸／松村秀実／松本倫代／丸井奈月／丸山育子／三木信子／水江美保／溝上富夫／三田村英宗／三津谷千恵子／宮川ヒサ／宮川真理／宮地文子／村井昇／村上健治／村田直司／森惠美子／森正廣／森川佐和子／森﨑律子／八木祐子／柳大路功／山内庸行／山尾修／山川清／山口公子／山口美佐子／山崎美智子／山田訓子／山田園子／山田俊朗／山本眞吾／山本正美／吉田聡子／吉田大作／吉野和康／李啓子／Leache／若杉徹朗／若山治子／和田幹司／和田隆義／和田裕子／渡邊勲世

●団体会費
大阪友の会／大阪西ワイズメンズクラブ

●法人賛助会費
㈲アテナ／イオングループ労働組合連合会／イオンリテールワーカーズユニオン／（社福）一粒福祉会／㈱エムピ／㈱カステロ／㈱京進／㈱美濃吉／㈱かんぼう／京セラ労働組合本部／清教学園／ソフトキューブ㈱／㈱ツールオカフジ／㈱デュアルエデュケーション／長門マリン㈱／㈲西田興産／日通旅行㈱大阪支店／日東薬品工業㈱／㈱ユニコーン

●里親会費
明見勝好／荒木美智／石本三恵／板原操／一瀬由起子／井上修二、晶子／請地久恵／大久保宏子／大原偉樹／大水光美／岡部雅子／鹿島恵美／柏木道子／鎌田勝江／川崎隆二／川治依子／木村千鶴／口丸かほる／倉野茂樹／米田明正／後藤朝子／後藤雅子／齊藤仁／佐藤道代／塩谷真人／清水明子／清水泰尚／白石敦士／鈴木敏久／高橋理佐子／高山恵理子／田中衣子／田中誠一／谷野麻実／辻本選子／坪倉幸弘／寺西勢津子／戸塚恭子／中谷太一／中谷良子／中村孔／中山豊子／西優子／西山美菜子・千晶・敦記／根津千枝子／ネパールへのかけ橋／野川節子／鏑恵理子／濱口みどり／浜本耕／林芙美子／JAFSハルハロ・Fランチ／久冨雅之／檜原敏之／姫野佐智子／平井静／平瀬美智子／洋野町国際交流協会／福田信／藤澤京子／本田伸一／前川純一／前田恵美子／松本倫代／宮川ヒサ／宮島秀樹／武藤英利矢／森惠美子／山尾修／山川清／山口美佐子／山本敏子／米田典子

●一般寄付
熱田親憲／伊奈徹／兼松利木雄／Kinoshita Shotaro／桑村壽子／櫻井紘哉／篠原勝弘／霜鳥正／ジョウショウカン／ソフトバンクつながる募金／辻本選子／土屋菊男／冨松英二／ナカニシタカヒサ／新田香織／服部貢／福澤邦治／濱谷稔夫・小百合／藤原正昭／古谷裕子／眞砂哲志／村上公彦／森本榮三／森本匡昭／山田麻里／大和キリスト教会支援委員会／米田明正／ニホンイヤサカ／ナモナキビリオネラ／ReShop KANAU

●井戸指定寄付
西宮中央教会／延原修／（一財）H_2Oサンタ

●井戸積立
佐藤手芸教室／JAFSぞうすいの会／田口吉三／日野西光尊／ゆりかご幼稚園

●井戸建設支援
○カンボジア
イオングループ労働組合連合会
○フィリピン
㈱ウォーターネット

●アジア・ネットワーク奨学会費
上野孝一／小山一雄／西川京子／村上公彦

●アジア・フレンドシップ夢基金
AFSインドグループ／AFSビジャプール／辻本選子

●アジアフレンドシップ基金
旅は道連れ会

●アジア・ユースサミット寄付
アイビー歌声サロン／浅田稔／アジアユースサミット実行委員会／熱田典子／イオングループ労働組合連合会／イオンリテールワーカーズユニオン／石神誠／岩﨑準一／上野孝一／㈱エイワット／江守猛／大本和子／岡本眞理子／㈱イメージワーカー／小原純子／小原孝彦／小原健史／小原弘子／小原帆乃夏／小原正也／小山田宗弘／柏木道子／木下敏子／木村文子／金陽子／古賀旭／齋藤公代／阪上博通／㈱さとけい／佐野光彦／澤村和子／三本松道昭／實清隆／JAFSサリ・サリ／杉原貞二郎／高岸泰子／田中壽美子／田中久雄／㈱デュアルエデュケーション／寺林史朗／公子／日本観光情報センター／任啓子／ネパールへのかけ橋／野杁育郎／端無勝／花房逸子／春木眞巳／JAFSハルハロ・Fランチ／星乃勝／㈱ホワイトマックス／松見博章／マッララジャンマン／武藤成生／森田登代子／安里佳世子／㈱山一／山田正人／横山浩平／吉田暢子／ReShop KANAU／渡辺治彦／渡邊宏樹／米田豊高

●アジア・ネットワークセミナー寄付
熱田典子／伊藤誠／上野孝一／太田宜子／大木洋子／大山利子／角谷道子／笠谷正博／鎌田勝江／神峯山寺／川端勝／川良幸子／木村征代／斎藤芙美子／庄子幸子／瀬尻芳子／谷阪洋子／辻本選子／東代清隆／中島和子／中島綾／中村敏子／西川龍夫／増山律子／松原直弘／水本裕子／妙代和也／山下玉英／米田明正

●アジア・子ども支援寄付
加芝ナミ子／つなぐ文化・ギータンジャリ友の会／㈱テーブルクロス／戸田恭子／ネパールへのかけ橋／のこ美容室／松尾慶治／饒平名知幸

●インド・HIV子どもと家族支援会費
苗村登美子

●スリランカ・サルボダヤ支援寄付
岡本朋子

●スリランカ・サルボダヤ支援会費
小澤勇／西田貞之／船戸康夫

●チャイルドアカデミー里親会費
辻本選子／福岡名津子

●ネパール・ピトゥリ支援会費
小川幸子／倉光和之／小松朱美／前田美津代／前田豊／宮本博幸／吉川照代

●ネパール・地域医療支援
林節子

●ネパール指定寄付
畑中義雄／JAFS北河内緑とふれあう会／東代清隆

●ネパール地震被災者支援寄付
饒平名知幸

●ネパール学校建設支援
長浜北ロータリークラブ

●フィリピン指定寄付
佐々木実

●AFS会議支援
辻本選子／毛利吉男

●地球幸せ募金
小代利子

●日印友好学園指定寄付
辻本選子／戸田恭子

●助成金
○インドネシア・アチェ・マングローブ植林支援
公益信託地球環境日本基金
○美山土と水と緑の学校支援
国立青少年教育振興機構
○新宮土と水と緑の学校支援
新宮市教育委員会生涯学習課
○アジア・ユースサミット支援
外務省NGO事業補助金／公益財団法人三菱UFJ国際財団

●40周年記念募金
明見勝好／浅野直人／熱田典子／阿部有紀／野アツ子／安藤幹雄／ケアセンター伊藤誠／井上淳子／井上周三／岩田史子／上田高久／植田延江／上野孝一／大木洋子／大阪西野田教会／大谷タカコ／大森文子／小川冨／沖田哲男／小野惠大／小原純子／柿島裕／笠谷正博／印牧武人／㈱グローバル／鎌田重明／栢下寿／川合千代子／川端勝／川良幸子／久保佑治／小林道明／小林陽子／斎藤芙美子／櫻井紘哉／佐々木健児・ゆみ子／佐藤手芸教室／佐藤瀾子／佐藤正明／柴谷享一郎／清佐藤道代／佐藤理香／芳子／仙野和子／水直子／菅原直樹／瀬尻幸子／菅谷句美子／菅原直樹／瀬尻芳子／田口裕子／竹／髙島純子／高瀬稔彦／谷阪洋子／日内泰子／豊中七夕祭り／谷野麻実／辻本選子／坪倉幸弘／寺西勢津子／戸塚恭子／中谷太一／中谷良子／中村孔／中山豊子／西優子／西山美菜子・千晶・敦記／根津千枝子／ネパールへのかけ橋／野川節子／鏑恵理子／濱口みどり／浜本耕／林芙美子／JAFSハルハロ・Fランチ／久冨雅之／檜原敏之／姫野佐智子／平井静／平瀬美智子／洋野町国際交流協会／福田信／藤澤京子／本田伸一／前川純一／前田恵美子／松本倫代／宮川ヒサ／宮島秀樹／武藤英利矢／森惠美子／山尾修／山川清／山口美佐子／山本敏子／米田典子／野西光尊／千田裕子／地本英子／辻本選子／坪内廣次／戸田恭子／冨松英二／中島和子／中島綾／中島小夜子／中島裕子／中西省三／中西豊次／中西洋／中西産業㈱／西川龍夫／西田貞之／根津千枝子／畠山ひろみ／濵口宸也／林田鉄／JAFSハルハロ・Fランチ／東野鈴枝／姫野佐智子／廣田恵美／冨尾貴美代／藤本市子／藤原正昭／別府浄照／細川憲和／細谷泉夫／堀口節子／本庄紀子／前田美保子／松岡利成／松原直弘／マッララジャンマン／三里健一／水本裕子／宮本照佳／妙代和也／村上公彦／森田康代／八木祐子／山川清／山本千加子／山本敏子／矢野佳昭／山本宏昭／横浜海商㈱／横山浩平／吉積慶子／吉田宏／横井文／米田明正／饒平名知幸／匿名希望34名

●物品・日用品・食料品等寄贈
浅井聡子／天野澄子／石川亜紀子／井場弥生／今井利子／大本和子／小原純子／鎌田直子／金敬姫／九鬼元義／澤村和子／住吉大社／髙木幸子／田中佐苗／田中久雄／高山臣司／東代清隆／中島綾／中元佐和子／南沢禮子／畑中ちずる／濱田圭子／平岡三峰子／平原榮子／宮崎禮子／森田素子

プルトップ回収のお礼

プルトップの回収にご協力ありがとうございました。

ここ３年間の回収により190kgが集まり、16,150円に換金できました。ネパールの地域医療支援のために充てさせていただきます。

ちょこっと気持ちを寄せていただくことで実現する支援。これからもよろしくお願いします。

里子の笑顔

勉強したくても経済的な理由で学校に行けない、進学の道を絶たれる。アジア協会ではそんなアジアの子どもたちを里親制度で支援しています。今回はネパールの里子の生活をお伝えします。

電気整備士・ホテルマネジャーを夢見て

ネパール・チュニケル村のナウリンセカンダリースクールでは現在、47名の子どもをアジア里親の会で支援しています。学校を訪れると子どもたちは笑顔で元気にあいさつしてくれます。

サンディープ・ナガルコット君は14歳で9年生。家の近くの学校から、教育制度が整っているこの学校に2年生のときに転入しました。学校で友達と過ごす時間も楽しいことです。将来の夢は電気設備士になることです。

ロジナ・シュレスタちゃんは16歳の10年生。良い先生が多く、友達と過ごす学校生活が楽しいそうです。将来の夢はホテルマネジャー。ホテルマネージメントを学べる大学に通いたいそうです。また学校では8年生までしかコンピュータの授業がなく、大学に行くまでにコンピュータをさらに学びたいと話す意欲的な姿勢が印象的でした。

子どもたちの親の多くは非正規の日雇い労働者で低所得です。学校では最近、他の地域から移住してきた家庭の子どもが増えています。仕事を求めてカトマンズに移住する人が増えるなど、経済的に厳しい状況です。この学校ではそのような状況の子も含め、新たな子どもの里親も募っています。今回紹介した2人の子どもたちのように将来の夢や希望を抱くたくさんの子どもたちを温かく見守ってください。

（JAFSスタッフ　中川 寛子）

「アジア里親の会」
里親募集

- 対象国はインド、カンボジア、ネパール、バングラデシュ、フィリピンです
- 会費は里子1人年額20,000円。複数も可です
- 里親には、里子の写真や成長記録をお届けします

アジアの友から

AFSスリランカ
ラクナ・ハリンディ・カンダゲ

アジア・ユースサミットで成長

―第6回アジア・ユースサミット（AYS）に参加中のラクナさんにお話を聞きました―

昨年からAFSスリランカのメンバーです。AYSは4年前に続き2度目の参加ですが、前回は参加者、今回は初めてコーディネーターを務めています。

2015年に大学生として参加した第4回AYSは、とても素晴らしい経験でした。多様な人・文化・習慣・考えに出会い、アイデアをたくさんもらいました。また、グループディスカッションでリーダー役を担ったことにより、グループの様々な考えをまとめる方法を学びました。

今回のAYSでは、参加経験があるので、スリランカからの参加学生を含め、参加者たちの身になった案内やコーディネートができていると思います。

スリランカでは大学の経営学部で財務管理を学び、卒業後の今は、ビジネスコンサルタント会社でコンサルタントとして働いています。その傍ら、スリランカ最大のNGOサルボダヤにボランティアとして関わっており、地域で指導者トレーニング、平和プロジェクト、就学前教育などに携わっています。

今回のAYSでも、毎日びっくりするぐらい素晴らしい時を過ごしています。どのプログラムも驚くばかりの内容で、様々な国々の学生から「地域を良くするプロジェクト」についてたくさんのアイデアをもらいました。

一番印象に残っているのは奈良県曽爾村へのフィールド研修で、都会での仕事を辞めて、曽爾村の地域おこし協力隊として地域の活性化に奮闘する若者の姿でした。また国際的な学生向けプログラムをどのように催し運営するのかについて、主催する実行委員やボランティアの皆さまが多様な参加者に細やかに気を配る姿や、洗練された運営を見て、多くのことを学びました。

環境コラム

サンマとセミ～環境変化

夏から秋に変わるころ感じたこと2つ。

8月の終わり、スーパーのサンマに「広告の新サンマは漁獲量が少なく、代わりに解凍サンマを特価販売」と断りが。ニュースで今年のサンマ不漁を聞いていましたが店頭にて実感。他国と漁獲競合もあるようですが、地球温暖化や、数年から10年単位で起こる黒潮大蛇行などで、日本近海の海水温が上昇しサンマの回遊ルートが変化し、日本近海に近寄らないのが不漁の原因とか。過去何年か不漁が続いていますがサンマも自然の産物。一因となる人為的な温暖化については、サンマを頂くためにも抑止に努めつつ、他の原因は自然現象としての様々な環境変化ですから、人間は力の及ばない自然の摂理の中で生きているのだと思い返し、自然の恵みの増減を受け入れて、頂ける分だけ味わいたいものです。海水温の上昇でスルメイカも不漁だそうですが、逆にシラスやイワシは豊漁だとか。

またいつもお盆頃から、アブラゼミやクマゼミに代わってツクツクボウシの声が聞こえ始め、夏の終わりを感じるのですが、年々聞かなくなっている気がします。今年聞いたのはお盆から3週間ほどで4回だけ。減っている？ナゼ？と調べてみると…。都市部ではヒートアイランドの影響でツクツクボウシの羽化する時期が早まっており、50年で1か月早くなったとの調査があるようです。他のセミの羽化も早まっていますが、ツクツクボウシの早期化が上回っているとのこと。そうか、ツクツクボウシが減っているのではなく早く鳴き始め、クマゼミやアブラゼミの声がにぎやかな時期と重なり、ツクツクボウシの声が聞こえないだけなんだ…と理解しました。

実はクマゼミは、島根出身の私には元は馴染みの薄いセミ。子どもの頃のセミ捕りではほぼ全てアブラゼミで、クマゼミを見た記憶はないのですが、今夏のある日、住まいのある京都で桜並木を見ると、幹にとまるセミは、10本見た木の全てでクマゼミ5匹・アブラゼミ1匹の比率でした。アブラゼミの幼虫は落葉や湿気の多い柔らかい土を好みますが、都市部では土が乾燥し固いのでクマゼミが増えているとの説は以前から知っており、7年前に大阪市の公園でセミの抜け殻調べをした時もクマゼミが多かったのですが、何気ない散歩中に圧倒的に優勢なクマゼミを目にしてこれを実感。ですがこのセミ分布も改めて調べると、信じていた理由が唯一でないと分かり、鳥の捕食から隠れる樹の多寡、樹液の好み、日照時間など影響する要因が多く、地域ごとの多様な自然条件で分布は様々という感じ。自然は奥深いなぁというのがセミの分布について今回調べた私の結論でした。　（JAFSスタッフ　川本 裕子）

入会ご案内

皆さまが会員となってサポートしてくださることで、安定した活動計画ができます。継続した活動をしていくためにも、ご協力をお願いいたします。

A．維持会費	年額1口	12,000円（月額1,000 円）
B．賛助会費	年額1口	6,000円（月額600 円＝振込手数料含む）
C．ジュニア会費（高校生まで）	年額1口	1,000円
D．団体会費	年額1口	20,000円
E．法人賛助会費	年額1口	50,000円

会費・寄付の振り込み先

郵便振込　00960-6-10835
三菱UFJ銀行中之島支店　普通1007011

JAFS 創立 40 周年

JAFSは10月10月で創立40周年となります。1979年の活動開始以来、皆様に多くのご支援ご協力をいただき心より感謝申し上げます。「誰もが生まれてきて良かったと思える地球社会」を目指しさらに活気ある歩みを進めて参りますので、ひき続きご支援をお願い申し上げます。

編集後記

学　生最後の年、半年余りのアジアの旅から帰国した私が目にしたのは朝日新聞に載った「インドに井戸を贈ろう」の記事。それに触発されてJAFSに入会して早40年。ふと当時の熱い想いが蘇るこの頃です。（裕）

10　月にJAFSは40歳。消費税率は10％に。外食のテイクアウトなら軽減税率8％が適用されますが、環境目線でのプラ問題対策はなされているのでしょうか？JAFSは廃プラゼロを目指したいですね。（典）

過　去味わったことがない暑い夏を経験しました。皆さんはいかがでしたか？クーラーで快適に過ごしましたか？日本はまだ幸せですね。自然環境の変化が激しいなか、東南アジアの子どもたちはどうでしょうか？（金）

J　AFSとの出会いは20数年前のインド植林ワーク。元は井戸掘りワークを新聞で見て、行きたい！と思ったのですが日程の都合で植林に。今、人々のわくわく感と真心をアジアとJAFSに向けてもらうには…？（川）

16　都道府県から86人。多数の応募に、作文コンテストの審査委員はうれしい悲鳴を上げています。アジアの未来を考える若者たちの提言は経済発展の光と影を直視した記述が目立ちました。審査の結果に乞うご期待。（敏）

▲毎日ドキドキ!? マングローブが生える海辺の湿地では、木を渡した粗末な橋が地元の人の通路＝２０１９年５月、フィリピン・マトノグ、ＪＡＦＳ会員 畑中義雄さん撮影

◀表紙の写真 １９８０年に完成したＪＡＦＳ寄贈第１号井戸。今は政府による簡易水道が整備されて記念物。村上事務局長とインドのＡＦＳメンバーと共に＝２０１９年７月、インド・ナグプール市ググリー村

募金にご協力をお願いします

アジアの安全な飲料水がない地域で
貧困に苦しむ人たちを支援する活動に使われます

郵便振替 00960-6-10835　アジア協会アジア友の会

編集・発行：公益社団法人 アジア協会アジア友の会

〒550-0002　大阪市西区江戸堀1-2-14　肥後橋官報ビル５階
☎ 06-6444-0587　FAX 06-6444-0581
URL：https://jafs.or.jp　E-mail：asia@jafs.or.jp

2019年10月 139号　　発行人：萩尾千里　　編集人：村上公彦
広報企画委員長：法花敏郎
編集アドバイザー：松本 督、黒沢雅善
編集スタッフ：熱田典子、岩﨑準一、大本和子、柿島裕、
金井英夫、川本裕子
印刷製本：あさひ高速印刷株式会社